

同志社大学  
2016 年卒業論文

議題：ひとりぼっち許容度と家族意識の関連性について

社会学部社会学科  
学籍番号：19131066  
氏名：田中美穂  
指導教員：立木茂雄  
(本文の総文字数：22,806)

## 要旨

論題：ひとりぼっち許容度と家族意識の関連性について

学籍番号 19131066

氏名 田中美穂

現代の社会では個人化が進んでいるが、その最中を生きる若者は「ひとりぼっち」に恐怖を感じている。個人化する社会と「ひとりぼっち」を避ける若者は相反するようにも見える。個人化する社会を生きる若者たちがその中でどのような生き方をしていくのか疑問を感じた。また、「ひとりぼっち」に対する意識も様々であるので、その違いが何か別の考えに違いをもたらすのかということも気になった。今回は、近年個人化が進んでいる「家族」について若者たちの意見を集め、「ひとりぼっち許容度」という尺度を用いて、「ひとりぼっち」に対する個人の意識が家族意識に与える影響や、それに影響を与える要素について量的調査を行った。

同志社大学の学生を対象に行った調査の結果、「ひとりぼっち許容度」は家族意識やジェンダーバイアスに影響を与え、また、家族のきずなや年齢などに影響を与えられるということが確認できた。

キーワード:ひとりぼっち許容度、家族意識、個人化

## 目次

### はじめに

1 先行研究	4
1.1 若者論	5
(1) 「個性」を煽られる子どもたち	5
(2) 「つながり」を煽られる子どもたち	7
(3) ひとりぼっちを回避する若者たち	8
1.2 家族と個人化について	9
(1) 家族の構造転換	9
(2) 近代家族回避	10
1.3 家族意識	11
(1) 直系家族意識	11
(2) 近代家族意識	11
(3) 合意制家族意識	11
1.4 家族システム	12
2 調査方法	13
2.1 調査概要	13
2.2 分析方法	18
3 結果	18
3.1 回答者の属性	18
3.2 記述統計	18
(1) ひとりぼっち許容度	19
(2) 〈直系家族〉意識	20
(3) 〈近代家族〉意識	20
(4) 〈合意制家族〉意識	21
(5) ジェンダーバイアス	22
(6) 家族システム評価尺度	22
a) 家族のかじとり	22
b) 家族のきずな	23
3.3 相関分析	23
3.4 単回帰分析	24
3.5 一元配置分散分析	26
(1) 家族システム評価尺度	26
a) きずな	26
b) かじとり	27
(2) 性別ダミー	28
(3) 年齢3分類	29
4 考察	30
4.1 記述統計についての考察	30
4.2 単回帰分析についての考察	31
4.3 一元配置分散分析についての考察	32
おわりに	33

## はじめに

「ひとりぼっちでいる」ということは学生に忌み嫌われがちだ。一人でご飯を食べることは「ぼっち飯」と呼ばれ、筆者の周りにも拒絶する学生が多く見られるし、言葉自体も自虐的に用いられることが多い。学生の間では、「ひとりぼっち」はなるべく避けるべき状況であると言える。

2009年には、昼ご飯を一緒に食べる友達がいない大学生がトイレでご飯を食べているという記事が朝日新聞の夕刊の一面に取り上げられ話題になった。その行動は「便所飯」と呼ばれた。これは、学生が「ひとりぼっちでいる自分」を周りの人に見られることを極度に恥ずかしいと思い発生した出来事である。もはや恥ずかしさよりも恐怖心が原因であるとして、心理学では「ランチメイト症候群」と病気の症状のように言われている。特に高親密性・高排他性の特徴を持つ女子の同性グループでその状況は顕著に現れる。

このように「ひとりぼっち」は学生に心理的な苦痛を与え、学生は時に異常な反応を起こす。2000年代に入ってからこのような状況が社会問題のようにメディアにとりあげられるようになったことは、その頃から若者の対人コミュニケーションに何か変化が起り始めていることを表しているのではないか。

現代の若者はインターネット環境が非常に整った状態の中を生きており、友人とのつながりも場所・時間を問わず行われるようになってきている。しかしその反面、孤独感が強まり不安や恐怖が生じていると土井隆義（2014）は述べている。若者は「ひとりぼっち」でいることの恥ずかしさや恐怖から逃れるために誰かと一緒にいることに注力している。

ひとりでいることを寂しいことだと思い、なるべく避けたいと考える感覚は社会においても若者の対人関係に影響をもたらすと考えられる。特に人生において最も大きな節目とされる結婚に対しての影響に関心を持った。2016年から本格的な利用が始まった、国民一人一人に12桁の番号を振り分けて社会保障や税の情報を管理しやすくする「マイナンバー制度」からもわかるように、家族から個人に社会の単位が変更されてきている。社会が、血縁や地縁に縛られず個人が自由に選択して生きて行く個人化を後押ししている。その中で家族には個人化の波が及んでいると山田昌弘（2013）は言う。

「ひとりぼっち」を避けたい若者と、個人化が進む社会は、真逆の方向を向いているのではないだろうか？総務省「国勢調査」によると年齢別未婚率は1960年から男女ともに上昇している。1980年の調査では、男性30～34歳で21.5%だったのが2010年の調査では、47.3%に、女性30～34歳で9.1%だったのが34.5%と30年で男女とも未婚率が倍以上に上昇している。しかし、「平成25年版厚生労働白書-若者の意識を探る-」の調査によると2010年の平均希望結婚年齢は男性で30.4歳、女性で28.9歳となっており、結婚を希望する年齢になっても男性だと約2人に1人、女性だと4人に1人は結婚できないと読み取ることができる。これから大学を卒業する学生が結婚する時には今よりも実際の初婚年齢は上昇している可能性は高いこともあり、学校にいるときと同じように「ひとりぼっち」を避けて早期結婚を望んでもデータ上は厳しいようだ。

さらに、家族に安定を求めるとなると、それも難しい。なぜなら、近代社会の中で作り上げられ、理想とされてきた家族モデルが維持されにくくなっているからだ。（山田，2013）男性が稼ぎ主となり、女性が家庭で家事をこなすという性別役割分業で成り立っていた近代家族は社会や経済の変化で今までのようにうまく運営することができなくなっている。「ひとりぼっ

ち」を回避する人が不安や恐怖を逃れ友人との表面的な付き合いに安心を得ている（大嶽さと子・吉田俊和，2008）のならば、小さい頃からメディアを通して知っていて、一般的と思われる近代家族の形に落ち着き、安定を得たいと考えるのではないだろうか。反対に「ひとりぼっち」に許容のある人の方が個人化の社会に適応した新しい家族の形を模索していくのではないか。

以上を踏まえ、本論では、若者の対人関係やコミュニケーションの変化と家族に対する意識の関係、育った家族が対人関係にもたらす影響、そしてこれからの家族について考える。1章では、若者論、家族の個人化についての先行研究を見ていく。2章では本研究の概要について、3章では調査結果、それに基づく考察を4章で述べていく。

## 1 先行研究

### 1.1 若者論

まず若者たちの対人関係について述べている先行研究を見ていく。若者について論じることはいつの時代もされてきた。「団塊の世代」、「団塊ジュニア世代」のように若者は生きた時代で分類され、大人たちはどうにか彼らの特徴をつかもうとしてきた。本稿で調査の対象にした若者は19～26歳の大学生で、「ゆとり教育」を受けて育ったことから「ゆとり世代」と呼ばれたり、物欲や消費欲がなく現実を悟っているように見えることから「さとり世代」と呼ばれたりしている。まずはその世代の対人関係の特徴を明らかにし、どのような背景から「ひとりぼっち」が避けられるようになっていったかを明らかにする。まず、今回対象となっている19～26歳の学生が小・中学生だった時期に小・中学生の対人関係について論じている土井（2004）の理論を紹介する。また、現在の若者の対人関係に欠かせないインターネットの普及によって変わる子どもたちのつながりについても同じく土井（2014）の理論を紹介する。

#### (1) 「個性」を煽られる子どもたち

今回調査対象になっている19～26歳の学生たちは、2000年代初頭に小学生・中学生だった世代だ。ちょうど彼らが学齢期に入っていた2000年代から、学生同士の殺人事件が多発している。2004年に長崎の佐世保で小学6年生の女兒が同級生の女兒をカッターナイフで殺害したことは世間に衝撃を与えた。殺人のきっかけは、お互いが投稿しているインターネットの掲示板で被害者が加害者の身体的特徴を書き込むという些細なことだった。2人は親友と呼ばれる関係にあったにもかかわらずこのような事件に至ってしまった。この事件から、若者の間で「友達の重さ」が問題になっていることを土井は『「個性」を煽られる子どもたち』（2004，岩波書店）で指摘している。ここからは、繊細に気を使いながら、お互いの衝突を避けるように高度な配慮をして友人と関わるようになった子どもたちのコミュニケーションの変化の原因を見ていく。

本来、親友とは自分の率直な想いをストレートにぶつけられる相手であったはずだが、昨今の親友とは、それを抑え込まないと「良好な関係」を築けなくなってしまっている。これは、相手への思いやりが強まっているからではなく、彼らの最大の関心事が「スムーズな人間関係をいかに保ち続けるか」という一点に向けられているからである。子どもたちがこのような考え方を持つようになった社会背景とは何なのか。土井はある中学生が新聞に投稿した文章に注目した。

「僕はいろいろ考えてる。吐き気がするような陰口を言われてること、部活、友人、好きな子のこと…。僕はそれを表に出さない。キャラじゃないから。」（「中学生★ひとりごと」『朝日新聞』2002年7月25日朝刊）

この中学生の投稿から土井は、現代の若者の「個性」に対する考え方を読み解いている。個性は、人間関係や自分自身の変化の中で得られるのではなく、生まれ持った素朴な自分の姿のことであると若者は捉えている。それゆえ、生まれた時から持っている完結した個性を自分の中から探し出し、磨いていくことが重要であると考えている。大学生においては、就職活動で自分が持つ仕事に役立つ個性を必死に探す姿が見られる。このように現代では社会に出る上でも、自分の個性を知っていることは非常に重要な要素となっているのだ。

つまり、若者たちが個性を自分の中から必死に探すのはそれを煽る社会的圧力が原因である。2003年に、SMAPの楽曲「世界に一つだけの花」が大ヒットした。この曲には「ナンバーワンにならなくていい、もともと特別なオンリーワン」という特徴的な歌詞がある。この歌詞が人々の心を打ったのは、人々が個性的な存在たることに価値を置く社会的圧力を感じていたからかもしれない。子どもたちもその圧力を受け、自分の個性を「キャラ」として受け入れ、「キャラ」に見合った行動をとるようになってきているのだ。そうすると、土井（2014）が注目した記事を投稿した中学生は、「キャラ」に応じた対応をとることで周囲の人間関係における摩擦を避けていると考えられる。若者たちは自分にあった「個性」を見出して、そのイメージの制約の中で周りとのコミュニケーションをとっているようだ。

しかし個性は本来相対的なものであり、絶対的な個性を求めてもゴールはなく、若者たちは強迫精神症的な不安に襲われていると土井（2004）は言う。自分の信じる「自分らしさ」の根拠はそう信じている自分の主観的な思い込み以外の何物でもなく、その点では他者を遮断した自分の世界で自分を作り上げている。

このような状況の中で強迫的な不安を少しでも取り除くために、子どもたちは周囲の身近な人間からの絶えざる承認を必要するようになる。少しでも安心を得るために、たとえ表面的であっても他人とつながろうとする。

このように、若者はお互いの衝突を避けるために親友と言われる仲であっても慎重に他人と関わる。それは自分の中に潜在的に存在している個性を探し出すことを重要視している若者が、自分の存在やあり方を認めてもらいたいという承認欲求を満たすために関係を維持しなくてはならないからだ。若者たちのこの承認欲求は、インターネット環境の整備が整った現代社会の中でさらに強められている。そこで、次は深まる友人とのつながりに翻弄されている若者たちの姿を見ていきたい。

## （2）「つながり」を煽られる子どもたち

近年のスマートフォンの普及は若者世代の対人関係に大きな影響を与えている。もはやそれがないと日常の人間関係の維持は難しいほどだ。中でもLINEの影響は大きい。音声電話とほぼ同じリアルタイムでのコミュニケーションができ、しかも音声電話と違って時間と場所をまったく気にしないやりとりが可能になっている。総務省が2014年に行った東京都の高校生約15000人を対象にした調査では、スマートフォンのコミュニケーション・アプリである「LINE」を利用している人数は全体で85.5%となっており、連絡には欠かせないサービスであることが

分かる。しかし、1日の平均使用時間は、女子が96.7分、男子が61.7分と男女差も見られるようだ。多少の男女差が見られるといえども、子どもたちの間では人間関係の常時接続が急速に進んでおり、ネット依存と呼ばれる現象が社会問題になっている。コミュニケーション・アプリを介した他社との交流にのめりこむ、つながり依存に陥りがちな子どもが多い。そこへ至る社会背景と心理メカニズムを『つながりを煽られる子どもたち-ネット依存といじめ問題を考える-』（土井，2014）から探る。

NHK放送文化研究所が1982年から5年おきに実施している「中学生・高校生の生活と意識調査」によれば学校を楽しんでいると感じる中高生はコンスタントに増え続けており、2012年の調査では中学生、高校生どちらも95%を超えている。理由では友達と話したり一緒に何かしたりすることが一番楽しいと答えている人が7割を超えている。同様の傾向は「日本人の意識調査」でもうかがえる。人間関係に満足していると答えた人の割合は若年層で2000年を超えたあたりから大幅に上昇している。地縁や血縁、同じクラスであるというような社会的な既存の制度や組織に縛られない人間関係作りが広まってきた。このような価値観の多様化の影響で、不本意な相手との関係へ無理やり縛られることが減ったことが、人間関係の満足度が上昇につながっていると土井（2014）は考える。

しかし、いつでもつながれる環境が用意された結果、孤独感が逆に強まる。人間関係に充実を感じる一方友人や仲間についての「不安や悩み事」も上昇している。制度的な枠組みが人間関係を拘束しなくなったということはつまり、制度的な枠組みが人間関係を保証してくれる基盤ではなくなり、それだけ関係が不安定になってきたことを意味する。自分の好きな相手を選んで付き合っている自由は自分も相手も持っており、選ぶ自由と共に、選ばれる自由もあることが人々の不安を招く原因だと土井（2014）は言う。

そのような不安は子どもたちも抱えている。彼らは沢山のメディアに囲まれて生きていることで、学校とは異なった価値観が社会にはいくらかでも存在することを幼いころからよく知る。だから、常に場の空気を読んで周囲の評価を確認しなければ、今自分が向かっている方向はこれでいいのか、その確証を得ることが難しくなっている。自分が進むべき方向についての迷いを払拭するため、周囲からの反応を絶えず探り、それを自分の羅針盤としている。その結果、他者から与えられる自己承認の比重が増し、それを得られるかどうか不安の源泉になる。そして子どもたちの間で、他者とつながってられない人間には価値がないかのような感覚が広がってきている。

土井（2014）は「一人であること」に対する捉え方の変化について以下のように語っている。

かつて人間関係が不自由だった時代の子どもたちは、強制された関係に縛られない「一匹狼」に憧れたものですが、今日の子どもたちは、一人である人間を「ぼっち」と蔑むようになっていきます。一人であることは関係からの解放ではなく、むしろ疎外感を意味するからです。（土井 2014: 37）

つまり、既存の社会制度の拘束から解放され、自由に人間関係を築けるようになっても、一人である人間は、コミュニケーション能力を欠いた人物とみなされ、否定的に捉えられてしまうと言うことだ。友人関係の多様性と自由度が増した結果、若者たちは選ぶリスクと選ばれるリスクを背負うことになり、精神的な不安を持つようになった。そして「ひとりぼっち」には否定的なイメージがもたれるようになったのである。

### (3) ひとりぼっちを回避する若者たち

これまで見てきた現代社会における若者の対人関係の特徴から、若者たちは友達と一緒に過ごす事で、コミュニケーション能力を欠いた「ひとりぼっち」にならずに済み、自分の個性や行動に承認を得るという彼らにとっての幸せと心の安定を享受している。しかし、若者がこの特徴を保持したまま個人化の進む社会を生きていくとすると、たくさんのストレスを抱えてしまうのではないだろうか。

はじめに述べた、「ひとりぼっち」への耐性が強い方が個人化の社会に適応していけるという問いを明らかにするためには、その強さを測る尺度が必要となる。そこで次は「ひとりぼっち」を回避したいという気持ちの強さを測る尺度を作成した大嶽とこの研究を紹介する。

大嶽・吉田（2008）は学校生活における青年期の友人関係について研究を行っている。その中でも特に女性における同性の友人グループの関わり合いについて、その中での心理行動を分析している。彼らが友人グループに所属する理由としては、複数であるからこそ得られる道具的・情緒的サポートの充足を得ることを挙げている。しかし一方で「一人で過ごすことによって浮いた存在になってしまう」という、他者からネガティブな認知をされてしまうのではないかという不安からグループに所属するとも予測している。そこで、人間が生得的にもつ欲求として社会や集団に所属し、そうすることで生き延びてきたという視点から人間を理解しようとした Baumeister & Leary（1995）の need to belong 理論を用い、一人で過ごすという行為に不安を感じるメカニズムを提示した。「集団でいることが好ましい」社会の中では「ひとりぼっちでいてはならない」という強迫的な集団規範が生まれる。このような「無理にでも友達を作り、一緒にいなくてはいけない」と考える規範意識を、大嶽（2007）は「ひとりぼっち回避規範」と指摘している。そして、大嶽（2013）は中高生を対象に行った調査から、「ひとりぼっち回避規範」を測定する尺度を開発した。青年女子のグループは男子のものより親密性と排他性が強く、親密で排他的な行動特徴が見られる（大嶽ほか、2010）。女子特有の友人関係が回避行動の背景にあるとして、大嶽ら（2010）は青年期女子を対象に青年期前期と青年期後期で「ひとりぼっち回避行動」について捉え方がどのように異なり変化を遂げているか、面接調査を通して調査をした。その結果、「ひとりぼっち回避行動」をとることの捉え方は年齢が上がるごとに変化し、緩やかな友人関係に変化していくことが示唆された。

なお、本稿では「ひとりぼっち」に対して耐性の強い人、つまり「ひとりぼっち回避規範」の低い人の考え方に焦点を当てているので、名称を「ひとりぼっち許容度」とし、点数の高い方が「ひとりぼっち」に対する耐性が強いと考えて用いる。また、大嶽（2013）の尺度項目は、中高生の学校生活における場面を想定したものであるため、今回は各項目を大学で起こることに替えて測定する。

#### 1.2 家族と個人化について

ここまで見てきたように現代の若者は、多様化し自由度が増した友人関係の中でひとりになるリスクに不安を感じながら、友人の承認を得ているという特徴を持つ。しかし、彼らが人間関係に安定した基盤を求めることは裏腹に、社会では個人化の波が押し寄せている。2016年から本格的な利用が始まった、国民一人一人に12桁の番号を振り分けて社会保障や税の情報を管理しやすくする「マイナンバー制度」からもわかるように、現代において社会の一単位が「家



族」から「個人」に移行している。そして、さらに「家族」自体も個人化しているということが言われている。その現象について山田（2013, 2014）の家族の個人化理論を紹介する。

### （1）家族の構造転換

1990年以降の現代社会の最大の特徴は、国家と並んで選択不可能で解消困難な家族に個人化の波が押し寄せてきたことであると、山田昌弘は「家族の個人化」（2014）において述べている。それには家族の多様化と家族規範の弱体化が進んだことが反映されている。山田は、家族の個人化が2つのレベルで起こっていることが重要だとしている。1つは1960年代の近代の枠内における「家族の個人化」で、もう1つは1980年から始まる「家族の本質的個人化」である。

「近代の枠内における個人化」は、家族関係が選択不可能で解消困難という性質を前提とした個人化で、更に2つのタイプに分離される。1つは地縁や血縁などの家族以外のシステムからの自由化である。例えば、家族全員で地域の祭りに参加することが習慣だったが、そちらに参加せず家族で旅行に出かけるという選択肢を得るといった家族主体の個人化である。もう1つは家族の内部での行動の自由の増大である。先ほどの例で示すと、父は地域の祭りに参加するが、母と娘はショッピングセンターに出かけるといったように自由に行動を選択できるという家族成員それぞれにおける個人化である。

もう一つの「家族の本質的個人化」とは、近代の枠内における個人化とは全く質が異なっている。それは「家族であること」を選択する自由、「家族であること」を解消する自由を含んだ個人化であるからだ。この傾向により現代の家族は、「近代家族」の特徴であった選択不可能で解消不可能という性質を崩壊させた。具体的に言えば、夫婦においては、結婚しないという選択肢、夫婦関係を解消するという選択肢、親子で言えば子どもが親を選んだり、親が子どもを選んだり、親子関係を解消するという選択肢が用意され、その選択は個人に委ねられているということになる。近代社会における結婚では恋愛感情を持ち、恋愛した相手が運命の人だと思って結婚していた。当時、そこには、他の選択肢などを考えにくかった。（山田, 2014）しかし、結婚と恋愛が分離され、結婚にも選択肢が与えられるようになると、恋愛感情を感じても結婚しなくて良いし、恋愛感情がなくても結婚できるという意識が生まれ、夫婦関係の本質的個人化をもたらしたのである。

これら2つの家族の個人化が家族の中にどのような影響をもたらすのだろうか。1つ目の家族の枠内での個人化は、家族成員の利害、価値観の衝突をもたらす。家族規範が弱体化し、規制による圧力がなくなることによって、家族のかじとりがうまくできなくなる。家族枠内での個人化が進行すれば、「どのような家族形態をつくるか」という点に関する家族間の勢力闘争が激化する。

2つ目の家族の本質的個人化をもたらすものは、まず、家族のリスク化である。家族の選択、解消が自由に選択できるようになったことで、常に離婚のリスクと隣り合わせになるようになる。次に、自分が選んだ選択肢の実現可能性は社会全体の中での個人の「力」関係に依存するようになり、家族が階層化する。これは希望した選択肢を実現するためには、全体社会の中で個人の経済力、魅力がものをいう社会になりつつあるということだ。最後に、関係を維持するために、何かを犠牲にすることは「よくないこと」とされることで、関係性が「即時的な満足が充足されるかどうか」によって判断される機会が増え、他人を欲求充足の道具と考えるしまうナルシズム的傾向が強まる。その影響で「家族が家族らしくなくなる」と現実と理想の家族の姿のギャップに不安を抱いてしまうようになる。

以上のように、家族の個人化は「家族」のあり方や構造を変化させていき、形成しにくく壊れやすいという今まで見られなかった家族の特徴を作り出す。理想的な家族像とはかけ離れた家族の形が実際に増えていくことになるだろう。その中で「近代家族」への回帰とも見られる意識が強まっていると山田は「日本家族のこれから-社会の構造転換が日本家族に与えたインパクト-」（2013）で述べている。

## （2） 近代家族回帰

家族の個人化が進み、家族の構造が転換する中、戦後の日本で理想的な家族の形とされてきた「近代家族」を好む近代家族回帰の現象が起きている。その背景を見ていく。

「近代家族」とは近代社会の成立とともに欧米で形成された家族のことで、日本では1970～80年代に「近代家族」は最盛期を迎えた。当時の未婚率・離婚率はともに低く、20代でおよその若者は結婚し、2～3人の子どもを育て、主に夫が仕事、妻が家事をする形を作り上げて行った。工業経済のおかげで雇用者は安定して収入を得ることができ、ほとんどの若年男性は妻子を養うに十分な給与を受け取ることができていた。専業主婦もこの時に生まれたと落合恵美子（1994）は述べている。「近代家族」を理想の形とし、そこから外れている家族を問題だと議論されていた時代には、同時に「近代家族の抑圧性」からの解放を求めた「近代家族論」の発展も起こった。

「近代家族論」は3つの内容を含意している。ひとつは、「多様な家族形態を認めよ」というもの。2つ目は「家族形成や解消の自由を認めよ」というもの。そして3つ目は家族の扶養やケアの責任を持ち合ったり、愛情の場を提供したりする近代社会における家族そのものへの批判である。

このような近代家族に対する議論は今までの家族形態が社会構造にそぐわなくなってきたことが原因で起こっている。近代家族を形成できる人はこれからもいるだろうが、経済状況や女性の社会進出などの影響もあり難しいこととなっている。すると、今まで近代家族に包括されることによって抑え込まれていた「生活上の不安」と「実在的不安」が人々の間で高まっていく。近代家族回避の傾向は、「生活上の不安」と「実在的不安」の高まりがもたらした現象である。（山田，2013）また、「おひとりさま」「同棲」「シェアハウス」など、家族がいなくても、「生活上の不安」や「実在的不安」が取り除けるような家族のオルタナティブへの関心の高まりも予想される。

今回調査の対象となっている学生たちは家族の構造転換期の中で生きてきた世代だろう。個人化が進む真っ只中を生きてきた若者たちが新しい家族を築いていくことになる。彼らはどのような家族志向を持つのだろうか。個人化の社会の基本単位は個人であるが、その流れに逆らうかのように、これからの社会を担う若者からは、つながりにしがみつこうと必死な様子が見えがえる。将来新しい家族築いていく彼らは、どのような家族意識を持っているのか。彼らの家族意識とひとりぼっち許容度の関係を測るため、日本社会における3つの家族意識について先行研究を見ていく。

## 1.3 家族意識

### （1） 直系家族意識

まず、直系家族とは、家族の中に一人強い権力を持ったものが存在しているような、わが国における伝統的な家族体系だ。理念型としては、形態的には結婚した息子がその親と、あるい

は未婚の兄弟姉妹をも加えて、同居している家族のことである。さらに息子にとっての祖父母にあたる人が同棲している可能性が高い。子どものうち一人だけが跡取りとして結婚後も親と同居し、家名、家系、家産などの世代継承という価値体系を維持している。農業などの第一次産業に従事している場合はその機能は維持されやすいが、工業化が進むとともにもたらされる人口の地理的移動、職業的移動によって機能を阻害される。(野々山久也, 2007)

## (2) 近代家族意識

先ほど近代家族回帰について述べたように、近代家族は近代社会の成立とともに18世紀後半から19世紀の間に形成された家族形態である。近代家族は、①公私の分離、②情緒的結合の重視、③子ども中心、④性別役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退とプライバシーの成立、⑦非親族の排除、⑧核家族、を特徴とするものである。(落合, 1994) アニメ「ちびまるこちゃん」のような、お母さんが主婦、子どもは2人といった現代人が想像しやすい家族体系が近代家族だと言える。実際に落合が「家族とは何か」と学生に聞くと、お互いに心を許せる、一緒にいるとくつろげると言った近代家族の特徴である②情緒的結合についての答えが多かった。つまり、家族とは近代家族のことを言い、それが理想形だと考えている人が多いということだ。このことから必然的に近代家族意識の高い人は多くなりそうである。

## (3) 合意制家族意識

最後に合意制家族意識であるが、これは家族をライフスタイルのひとつとして捉える近年見られる新たな動向を源泉とするものである。今までの家族社会学では家族を集団と認識してきたが、最近の家族の捉え方として、様々なライフコースを生きる複数の個人としての家族成員たちの同調の場であるというものがある。(野々山, 2007) 近年では女性たちの家庭外就労の割合が高まり、女性も家庭から解放されてきている。それまでの家族の規範に縛られないようになり、人々は主体的に自ら状況を見て行動の選択を行うようになる。家族を選択する場合は、どんな時期に誰と結婚し、どのような場所に住み、何人子どもを産み、どんな生活をするかは個人に委ねられている。公式な籍は入れずに事実上夫婦生活を行っている非婚カップルや、意図的に子どもを作らない共働きの無子夫婦(DINKS)などが、家族をライフスタイルと捉えている人々の例と言える(野々山, 2007) このように合意制家族意識は、既存の意識や今までの家族規範にとらわれない家族意識だと言える。

家族意識は個人の将来の家族志向として捉え、その人がどのような家族の中で育ってきたのかということとは異なる。しかし、個人の対人コミュニケーションはその個人がどのような家庭で生まれ、育ってきたかということとも大きく関係していると考えられる。そこで、生まれ育った家族システムを2つの次元を用いて測る、家族システムの評価尺度について次は見えていく。

## 1.4 家族システム

家族システム評価尺度(FACESKG)は、オルソンらが提唱した家族システム円環モデルを基に、立木茂雄(1993)が妥当性を検討し、日本の家族を念頭に独自に開発された。円環モデルでは、家族システムの機能が健康であるかどうかはきずなとかじとりによって決定されると考える。きずな・かじとりそれぞれが中庸でバランスのとれた状態にある時に家族システムの機能は最適となり、そこから極端に逸脱していると家族システムの機能は不全である。多くの研究を通して、円環モデルにおける、きずな・かじとりの2つの次元は夫婦・家族システムを理解する上で鍵となることが示されてきた。

きずなは、家族の成員がお互いに対して持つ情緒的結合と定義する。きずなは2つの要素からなっており、1つは家族メンバーを感情的に同一化させる側面で、家族のきずなの極端に強い段階として表される。もう1つは反対に家族の成員を家族システムから遠ざけようとする側面で、きずなの極端に弱い段階として表される。この2つがバランスのとれた段階で家族システムは最もうまく機能する。

かじとりとは状況の変化や成員の変化・成長に応じて夫婦・家族システムを柔軟に変化させる能力である。円環モデルでは、状況に応じて家族内のリーダーシップや役割、しつけや問題解決の交渉スタイルを柔軟に変化させる能力として、かじとりを考える。最も健康的な家族システムは、かじとりの次元の真ん中の段階に位置する。その段階にある家族は形態維持と形態変容の間のバランスが保たれている。このような家族では、お互いコミュニケーションを通じて言いたいことが言え、リーダーシップは民主的であり、交渉をうまく進めることができる。

立木（1993）はきずな・かじとりのそれぞれの強さを4類型に分類し、家族のシステムを評価する尺度を作成した。きずなの水準が極端に高い場合を「ベツタリ」きずなが中庸ではあるが、ある程度高い場合を示すのを「ピツタリ」とした。同様にきずなが中庸ではあるが、ある程度低めの場合を「サラリ」きずなが極端に低い場合を「バラバラ」と示す。かじとりに関しては、それが極端に高い場合を「てんやわんや」かじとりが中庸であるが、ある程度高い場合を「柔軟」とする。同様にかじとりが中庸ではあるがどちらかというやや固めの場合を「きっちり」かじとりが極端に固い場合を「融通なし」とした。本稿では、2009年に修正を加えた最新版の家族システム評価尺度（FACESKIV-16）を用い、家族システムがひとりぼっち許容度のどのような影響を与えるか、も見ていく。

以上の先行研究では、ひとりぼっちを回避をしながら、つながりにしがみつ়く若者たちの姿と、社会の構造転換に伴い家族まで個人化している現実を確認できた。ここから考えられる仮説は、①ひとりぼっち許容度の高い人は、家族規範を重んじる〈直系家族〉意識や、〈近代家族〉意識が低くなり、家族規範から解放された〈合意制家族〉意識が高まることだ。それに伴い、近代家族の大きな特徴である性別役割分業の意識からも解放されると考えられるので②ジェンダーバイアスも低くなるだろう。また、立木（1993）が作成した家族システム評価尺度の質問項目を用いて生まれ育った家族システムとひとりぼっち許容度との関係も確認したいと思う。家族の「きずな」が強い方が、人とのつながりへの執着が強く、反対に孤独に対する耐性が弱いと考えられるので、③家族の「きずな」が高い方が、ひとりぼっち許容度は低くなるだろう。家族の「かじとり」は家族のシステムを柔軟に変化させる能力である。かじとりの固い家族では家族規範が弱体化し個人化が進むと思われるので、④家族の「かじとり」が固い方が、ひとりぼっち許容度が高くなるだろう。さらに、ひとりぼっち回避に男女差や、年齢差があること（大嶽，2010）が言われていることから、⑤ひとりぼっち許容度は女性のほうが低く、年齢が上がるほど高くなる本研究からも同じ結果が見られるのか検証する。以上5つの仮説を調査の結果から検証していく。

## 2 調査方法

### 2.1 調査概要

この調査は、同志社大学の学生を中心とする19歳～26歳の男女を対象に行った。調査は質問紙によるものであり、2016年7月25日に社会学部の講義内にて配布し、回収した。回答は

全て数値化し、統計解析ソフトである SPSS を用いて解析を行った。先行研究を参考に調査で調べたことは、主に「ひとりぼっち許容度」、「家族意識」、「ジェンダーバイアス」、「家族システム」についてである。「家族意識」については、直系家族、近代家族、合意制家族という家族の3類型を用いて吉岡祐紀（2014）が作成した尺度を利用する。〈近代家族〉意識については落合恵美子の著書『21世紀家族へ』（1996）、〈直系家族〉意識、〈合意制家族〉意識については野々村久也の著書『近代家族パラダイムの革新』（2007）を参照している。「ジェンダーバイアス」の項目についても、吉岡（2014）が山本有香子（2008）を参照して作成した「ジェンダー意識」という項目を利用した。「ジェンダー意識」は性別役割分業に対する意識の指標として用い、本稿では、その意識が高いほどジェンダーバイアスが強いと判断する。名称もこのことから「ジェンダーバイアス」とした。「家族システム」は立木（1993）が作成した家族システム評価尺度（FACESKG）の最新版である FACESKGIV-16（立木，2009）を用いる。

ひとりぼっち許容度については、大嶽（2013）が作成した「ひとりぼっち回避規範」を計る12項目を大学生活において起こる行動に置き換えさらに、大学生活で置き換えにくいと考えられる項目を削除して作成した。置き換えた11項目は以下の表1に記す通りである。

表1 ひとりぼっち許容度の作成

ひとりぼっち回避規範		ひとりぼっち許容度	
1	部活動の練習に行く時、友達と誘い合っていく	→	サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う
2	クラスがえをしたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友だちを探す	→	新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探す
3	友だちと約束した上で、一緒に下校する	→	友達と約束した上で、一緒に帰る
4	休み時間を友だちと一緒に過ごす	→	休み時間を友達と一緒に過ごす
5	昼休みに友だちと一緒に食事をする	→	昼休みに友達と一緒に昼食をとる
6	掃除場所に誰かと一緒に行く	→	教室に誰かと一緒に行く
7	職員室に用がある時、誰かについてきてもらう	→	学習支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらう
8	友だちと誘い合ってトイレに行く	→	友達と誘い合ってトイレに行く
9	委員や係を決める時、あらかじめ友だちと一緒にできるように打ち合わせておくこと	→	履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にできるよう打ち合わせをしておく
10	どの部活動に入部するかを友だちと相談して決める	→	どのサークルやゼミに入るかを友達と相談して決める
11	登校する時、どこかで友だちと待ち合わせをする	→	登校する時、どこかで友達と待ち合わせをする

大嶽（2013）の「ひとりぼっち回避規範」は中高生向けに作られたものであるため、場面設定が中学校や高校の校内に限られてしまう。今回は同志社大学の学生を対象に調査をしたため、元の項目から意味を変えない程度に、大学内で起こることに置き換えて項目を作成し直した。削除したのは「特別教室を使う授業の時、友達と誘い合っていく」という項目で、大学の授業は高校までと違いクラスルームがなく、教室移動は基本的であるため削除した。場所を移動するという意味では、「6 掃除場所に誰かと一緒に行く」という項目を「6 教室に誰かと一緒に行く」とした。なお、「家族意識」「ジェンダーバイアス」については全て逆項目であり、分析時に数値を逆転して用いている。次ページからは各質問項目の表を示す。

表2 ひとりぼっち許容度

	非常にそうした方がよいと思う	そうした方がよいと思う	そうした方がよいと思わない	まったくそうした方がよいと思わない
1 サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う	1	2	3	4
2 新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探す	1	2	3	4
3 友達と約束した上で、一緒に帰る	1	2	3	4
4 休み時間を友達と一緒に過ごす	1	2	3	4
5 昼休みに友達と一緒に昼食をとる	1	2	3	4
6 教室に誰かと一緒に行く	1	2	3	4
7 学習支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらう	1	2	3	4
8 友達と誘い合ってトイレに行く	1	2	3	4
9 履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にできるよう打ち合わせしておく	1	2	3	4
10 どのサークルやゼミに入るかを友達と相談して決める	1	2	3	4
11 投稿する時、どこかで友達と待ち合わせをする	1	2	3	4

表3 〈直系家族〉意識を測る尺度

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1 長男は結婚した後、両親と同居するべきだ	1	2	3	4
2 子どもが一人しかいない場合に望む子どもの性別は男児である	1	2	3	4
3 結婚時において、姓は夫側の姓を選択したいと思う	1	2	3	4
4 家族を統率する権利は父親(夫)が持ち、長男が相続するべきだと思う	1	2	3	4
5 夫婦で何か方針を決める時は、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの都合・意見を優先させた方がよい	1	2	3	4

表4 〈近代家族〉意識を測る尺度

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1 家族は何よりもまず、子どものことを第一に優先させるべきだと思う	1	2	3	4
2 夫婦がいて子どもが2、3人いる核家族形態こそ、あるべき家族に姿だと思う	1	2	3	4
3 結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う	1	2	3	4
4 結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわいい妻」だと思う	1	2	3	4
5 結婚は個人のライフスタイルの優先をするよりも、集団としてまとまりを強めるべきである	1	2	3	4

表5 〈合意制〉家族意識を測る尺度

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1 夫婦で何か方針を決める時は、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの意見・都合を優先させた方がよい	1	2	3	4
2 家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う	1	2	3	4
3 老後は老夫婦だけで暮らすのがよいと思う	1	2	3	4
4 子どもが一人しかいない場合に望む子どもの性別は女兒である	1	2	3	4
5 同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族である	1	2	3	4
6 結婚時において、姓を変えることに抵抗がある	1	2	3	4

表6 ジェンダーバイアスを測る尺度

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
1 人から危害を加えられそうになった時、身を守るには男でないとだめだと思う	1	2	3	4
2 大地震や火事など緊急事態の時、その場を取り仕切るのは、男でないとだめだと思う	1	2	3	4
3 重いものを運んでもらう時、男でないとだめだと思う	1	2	3	4
4 自分が病気や介護を必要とする時、女性に面倒を見てもらいたい	1	2	3	4
5 健康や生活に関わる事柄に敏感なのは女性だと思う	1	2	3	4
6 子どもが病気で苦しんでいる時、それを我が子として感じ取れるのは母親だと思う	1	2	3	4
7 生活優先の政治を推し進められるのは女性だと思う	1	2	3	4
8 子どものちょっとした変化に気づくのは母親だと思う	1	2	3	4

表7 家族システム評価尺度

	概念	水準
1 問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	かじとり	柔軟
2 家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	かじとり	きっちり
3 困ったことが起こった時、いつも勝手に判断を下す人がいる	かじとり	融通なし
4 わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	かじとり	柔軟
5 家の決まりは皆が守るようにしている	かじとり	きっちり
6 わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	かじとり	てんやわんや
7 問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がとおる	かじとり	融通なし
8 わが家では家族で何か決めても、守られたためしがない	かじとり	てんやわんや
9 たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある	きずな	サラリ
10 わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない	きずな	サラリ
11 悩みを家族に相談することがある	きずな	ピツタリ
12 家族はお互いの体によくふれあう	きずな	ベツタリ
13 家族の間で、用事以外の関係は全くない	きずな	バラバラ
14 家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がない	きずな	バラバラ
15 休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある	きずな	ピツタリ
16 誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている	きずな	ベツタリ



## 2.2 分析方法

「ひとりぼっち許容度」の11項目については、それぞれの回答に「非常にそうした方がいいと思う」～「まったくそうした方がいいと思わない」の4件法で尋ねた。「非常にそうした方がいいと思う」を1点、「まったくそうした方がいいと思わない」を4点とし、11項目の合計得点で高いほど「ひとりぼっち許容度」が高いということになる。

「家族意識」については、「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」がそれぞれ5項目、「〈合意制家族〉意識」が6項目でそれぞれの回答に「あてはまる」～「あてはまらない」の4件法で尋ねた。「あてはまる」を4点、「あてはまらない」を1点とし、項目の合計得点の高いほど、その「家族意識」が強いということを表す。

「ジェンダーバイアス」では、8項目を「家族意識」と同じ方法で点数化し、点数が高ければジェンダーバイアスが高く、性別役割分業を支持する意識が強いということである。

「家族システム評価尺度」は、家族の様子に最もあてはまるものをきずな、かじとりの各8項目から1つずつ選択してもらった。そして、選択された項目がきずな、かじとりのそれぞれの水準にあたるかで家族システムを測定した。

最後に年齢と性別であるが、これらはそれぞれにダミー変数を当てて尺度とした。年齢は、19歳(n=40)を「1」、20歳(n=37)を「2」、21～26歳(n=32)を「3」として「年齢3類型」という尺度を作成した。性別は、女性を「0」男性を「1」として「性別ダミー」という尺度を作成した。

以上この8つの尺度を中心に分析を行う。「家族意識」と「ジェンダーバイアス」は「ひとりぼっち許容度」の従属変数として、「家族システム評価尺度」、「年齢3分類」、「性別ダミー」は「ひとりぼっち許容度」の独立変数として扱い分析を行い、相関分析、単回帰分析、一元配置分散分析を行った。

## 3 結果

### 3.1 回答者の属性

調査の結果、同志社大学の学生を中心とした19歳～26歳の男女111人から回答を得ることができた。回答者の内訳は以下のようなものである。性別は、男性が41人(36.9%)女性が67人(60.4%)で、学部生が107人、院生が1人、その他が2人だった。社会学部の授業であることもあり、社会学部関係の学生が88人と全体の約80%を占めており、その次に多いのは商学部で11人(約10%)となっている。学部にも偏りの見られる結果となってしまったが、分析には十分なサンプルを回収することができた。

### 3.2 記述統計

まずは、「ひとりぼっち許容度」「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制〉家族意識」「ジェンダーバイアス」「家族システム評価尺度」それぞれの調査項目について回答の傾向を見ていく。

### (1) ひとりぼっち許容度

ひとりぼっち許容度に関する項目の回答は以下の図1に示すとおりである。「非常にそうした方がいいと思う」と「そうした方がいいと思う」の肯定意見の割合が50%を超えているのは、「どのサークルや、ゼミに入るかを友達と相談して決める」「履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にいるように打ち合わせておく」「昼休みに友達と一緒に昼食を食べる」「休み時間を友達と一緒に過ごす」「新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探す」「サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う」である。中でも「昼休みに友達と一緒に昼食を食べる」と「新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探す」の肯定意見は80%を超えていた。反対に、登下校や、トイレに行く、教授の部屋に用事に行くといった一時的な行動に関しては、そうした方がいいと思わない人が60%以上を占めた。

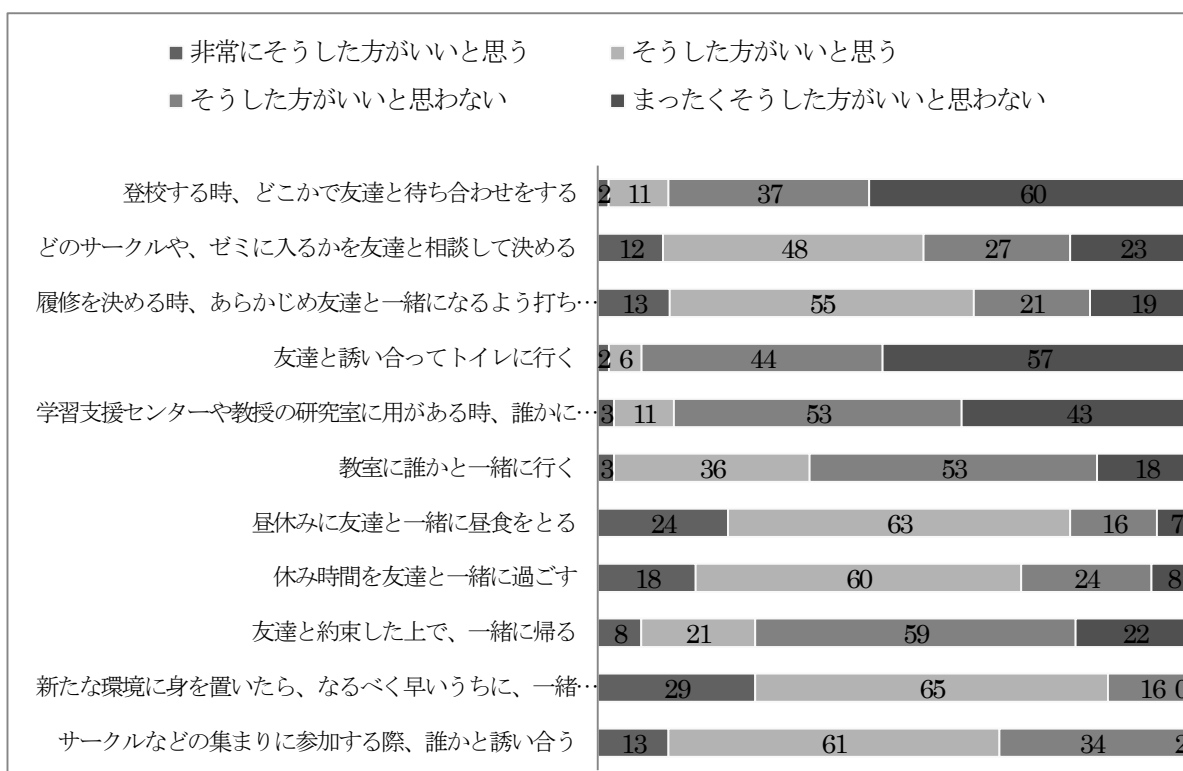


図1 ひとりぼっち許容度に関する項目の回答

## (2) 〈直系家族〉意識

〈直系家族〉意識に関する項目の回答は図2に示すとおりである。この項目に対する回答は、ほとんどの項目で度数が「あてはまらない」「まったくあてはまらない」の否定意見に偏っていた。しかし、「結婚時において、姓は夫側の姓を選択したいと思う」の項目に限っては、「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」の合計が70%と非常に高かった。

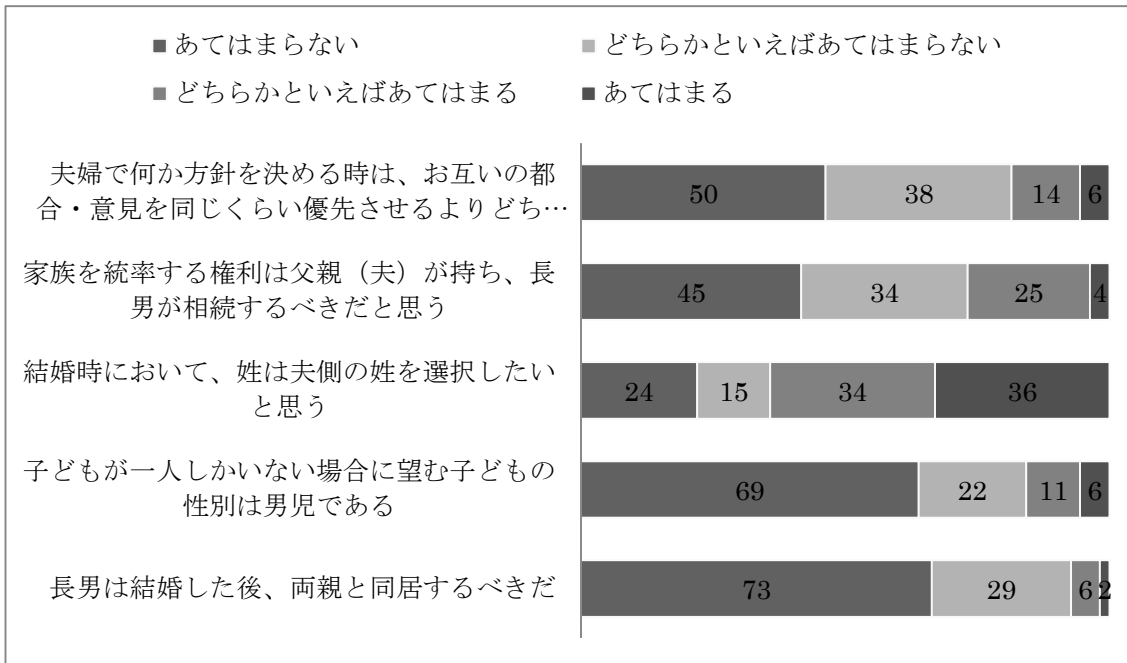


図2 〈直系家族〉意識に関する項目の回答

## (3) 〈近代家族〉意識

〈近代家族〉家族に関する項目の回答は図3に示すとおりである。これらの項目に関して、肯定意見の割合が目立っているのは、「結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う」「家族は何よりもまず、子どものことを第一に優先させるべきだと思う」の2項目だった。反対に否定意見の割合が非常に高かったのは「結婚において女性に求めるのは「家庭的で夫を支えるかわいい妻」だと思う」の1項目だった。

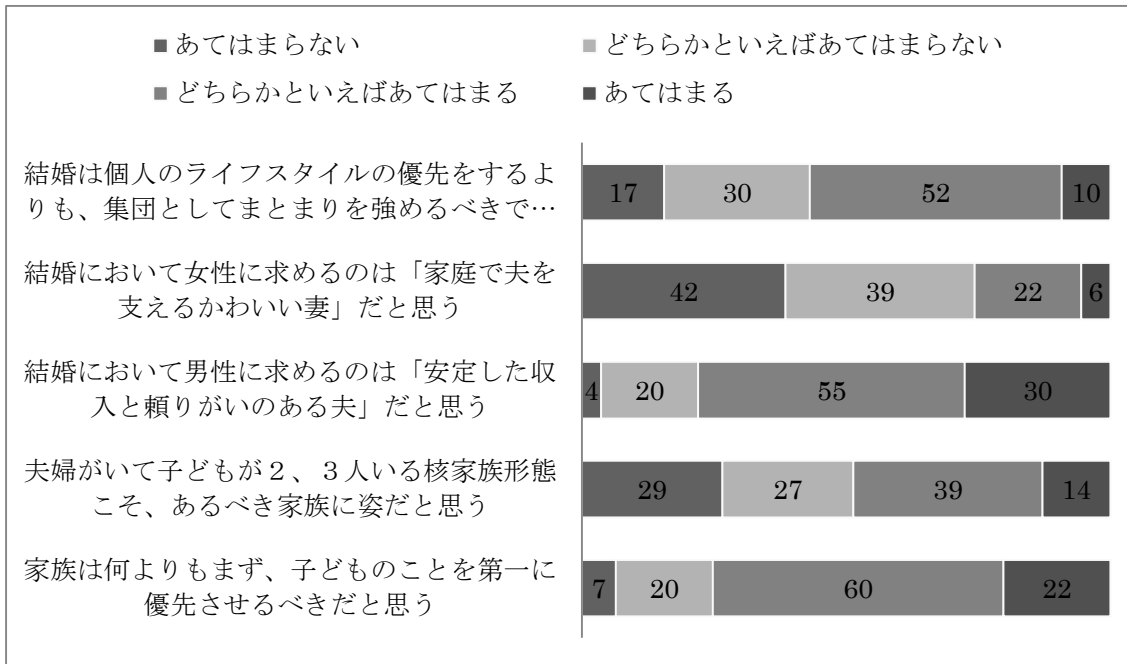


図3 〈近代〉家族意識に関する項目の回答

#### (4) 〈合意制〉家族意識

〈合意制〉家族意識に関する項目の回答は図4に示したとおりである。肯定意見の割合が約80%となっているのは、「夫婦で何か方針を決める時は、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの意見・都合を優先させた方がよい」の1項目だけだった。否定意見では、「結婚時において、姓を変えることに抵抗がある」「子供が一人しかいない場合に望む子どもの性別は女兒である」の2つが約80%となっていた。

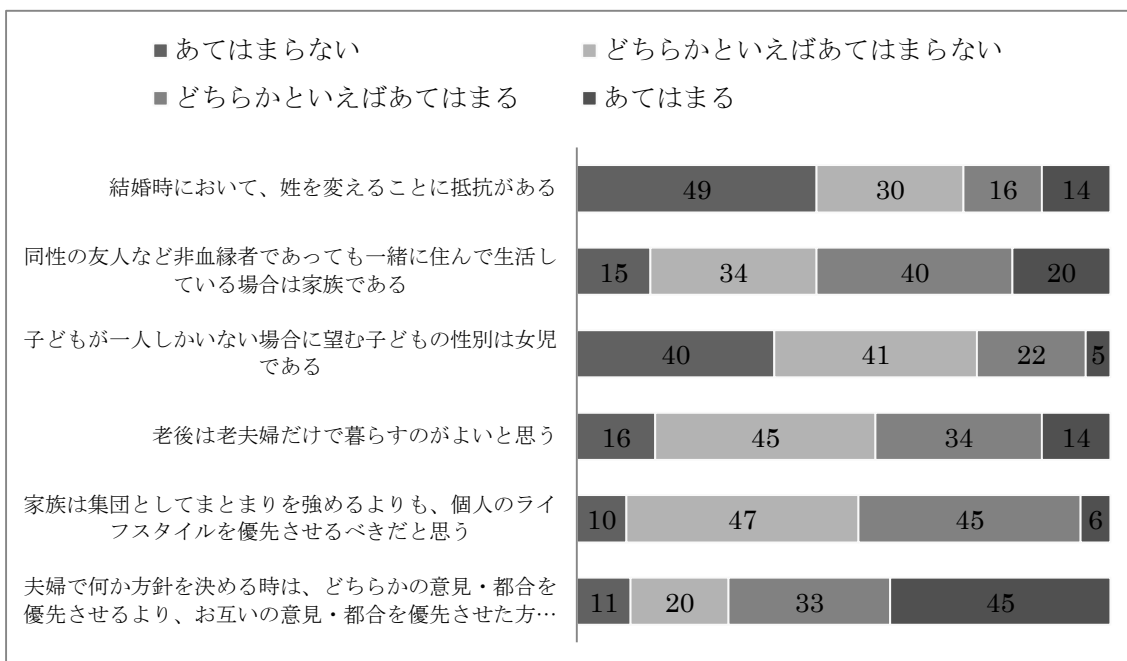


図4 〈合意制〉家族意識に関する項目の回答

### (5) ジェンダーバイアス

ジェンダーバイアスに関する項目の回答は図5に示したとおりである。否定意見が60%を超えた項目は「大地震や火事など緊急事態の時、その場を取り仕切るのは、男でないのだめだと思う」「生活優先の政治を押し進められるのは女性だと思う」の2項目で、それ以外は比較的肯定意見に回答が偏った。中でも「子どものちょっとした変化に気づくのは母親だと思う」「自分が病気や介護を必要とする時、女性に面倒を見てもらいたい」の2項目は肯定意見が約80%となっていた。

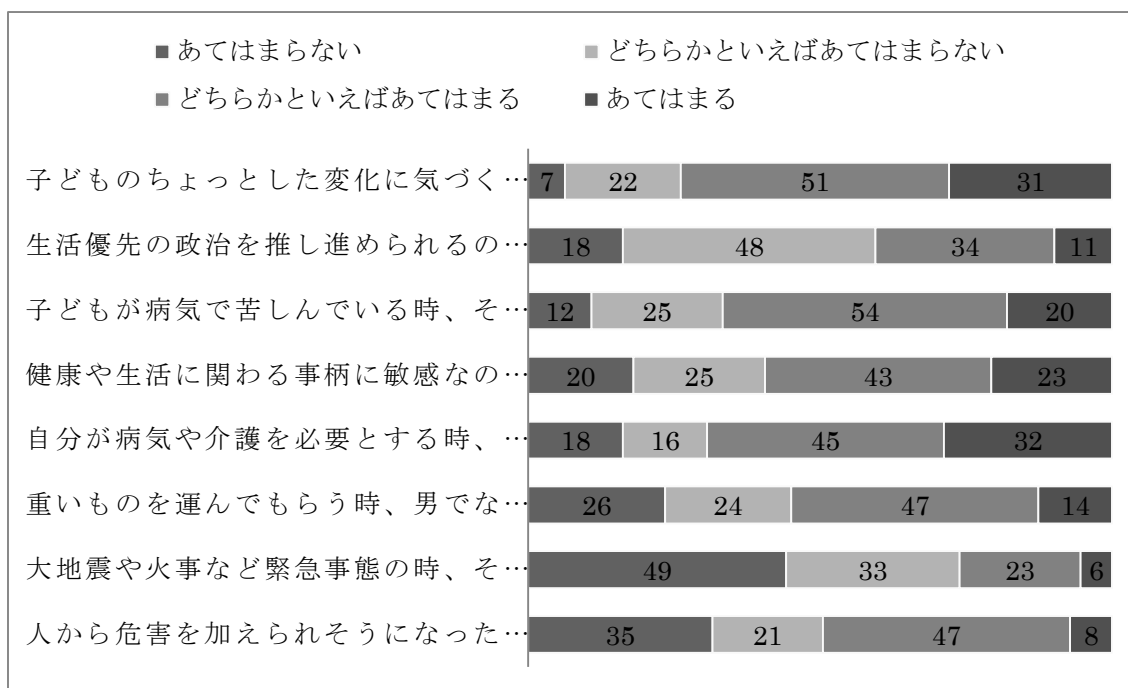


図5 ジェンダーバイアスに関する項目の回答

### (6) 家族システム評価尺度

#### a) 家族のかじとり

家族システム評価尺度の家族の「かじとり」に関する項目の回答を4つの水準に置き換えた結果は図6に占めるとおりである。回答は「きっちり」「柔軟」の中庸な水準が多く、そのうち「きっちり」が40%と大きな割合を占めている。また、「融通なし」と「てんやわんや」が同率となっている。

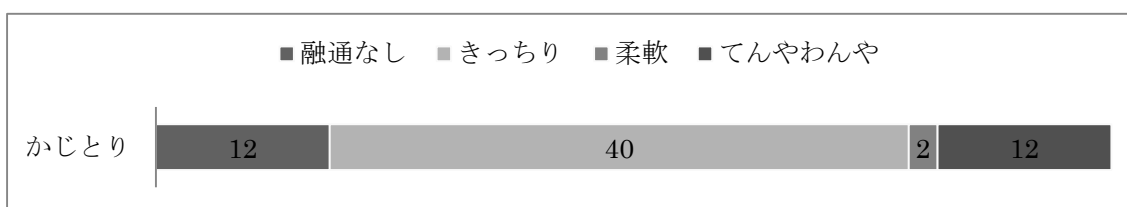


図6 家族のかじとりに関する項目の回答

### b) 家族のきずな

家族システム評価尺度の家族の「きずな」に関する項目の回答を4つの水準に置き換えた結果は図7に示したとおりである。家族の「かじとり」の結果同様にこちらにも中庸な水準に回答が偏っている。

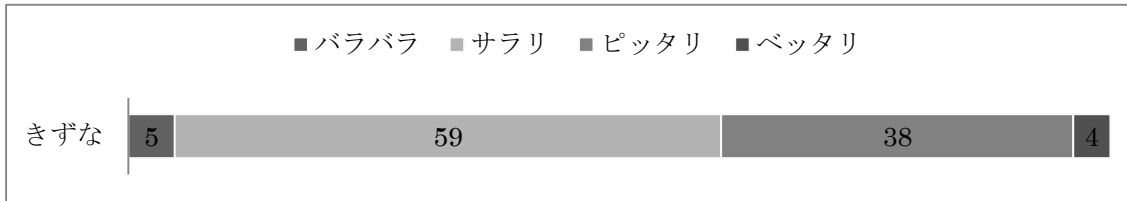


図7 家族のきずなに関する項目の回答

### 3.3

### 相関分析

「ひとりぼっち

許容度」「〈直系家族〉

意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」「ジェンダーバイアス」「かじとり」「きずな」「性別ダミー」「年齢3分類」の9つの変数のそれぞれの変数間の関連を調べるため、相関分析を行った。結果を以下の表8に示す。

ひとりぼっち許容度は〈直系家族〉意識、〈近代家族〉意識、ジェンダーバイアス、年齢3分類のそれぞれの間での相関関係が1%水準で有意となり、非常に強い相関が見られた。年齢3分類との間でのみ、正の相関が見られ、他は全て負の相関となっている。また、きずなとは5%水準で有意となり、負の相関が見られた。一方、〈合意制家族〉意識、かじとり、性別ダミーの間には相関が見られなかった。

表8 各変数間の相関分析

	ひとりぼっち許容度	直系家族意識	近代家族意識	合意制家族意識	ジェンダーバイアス	かじとり	きずな	性別ダミー	年齢3分類
ひとりぼっち許容度	—	-0.281**	-0.416**	-0.178	-0.369**	0.038	-0.241*	-0.184	0.266**
直系家族意識		—	0.501**	0.320**	0.401**	-0.116	0.072	0.164	-0.202*
近代家族意識			—	0.324**	0.404**	0.1	0.197*	0.137	-0.127
合意制家族意識				—	0.398**	-0.064	-0.06	0.029	-0.002
ジェンダーバイアス					—	0.068	0.069	0.144	-0.181
かじとり						—	-0.162	0.035	-0.05
きずな							—	-0.116	-0.023
性別ダミー								—	0.039
年齢3分類									—

\*\* 相関係数は1%水準で有意(両側)です。

\* 相関係数は5%水準で有意(両側)です。

### 3.4 単回帰分析

次に「ひとりぼっち許容度」を独立変数とし、「〈直系家族〉意識」「〈近代家族〉意識」「〈合意制家族〉意識」「ジェンダーバイアス」を従属変数として単回帰分析を行った。結果を以下の図に示す。

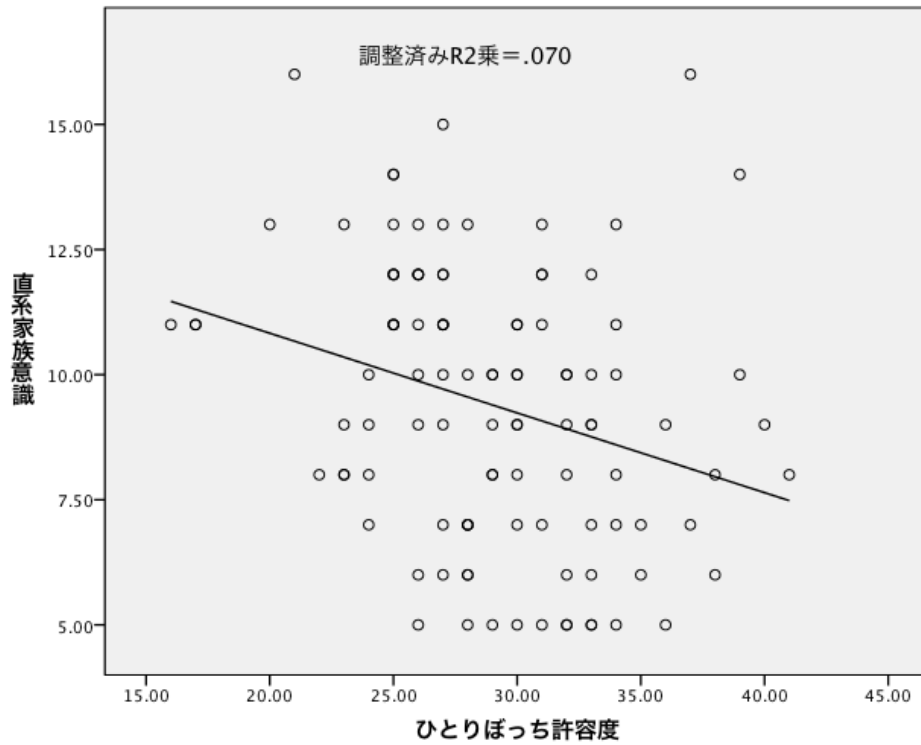


図8 ひとりぼっち許容度と直系家族意識の回帰プロット

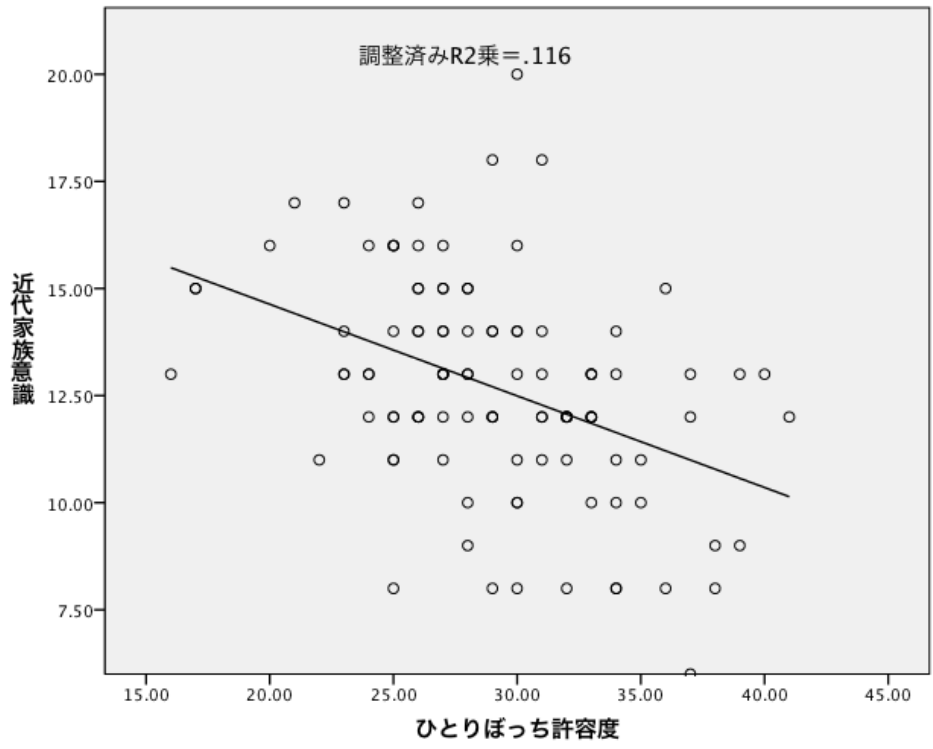


図9 ひひとりぼっち許容度と近代家族意識の回帰プロット

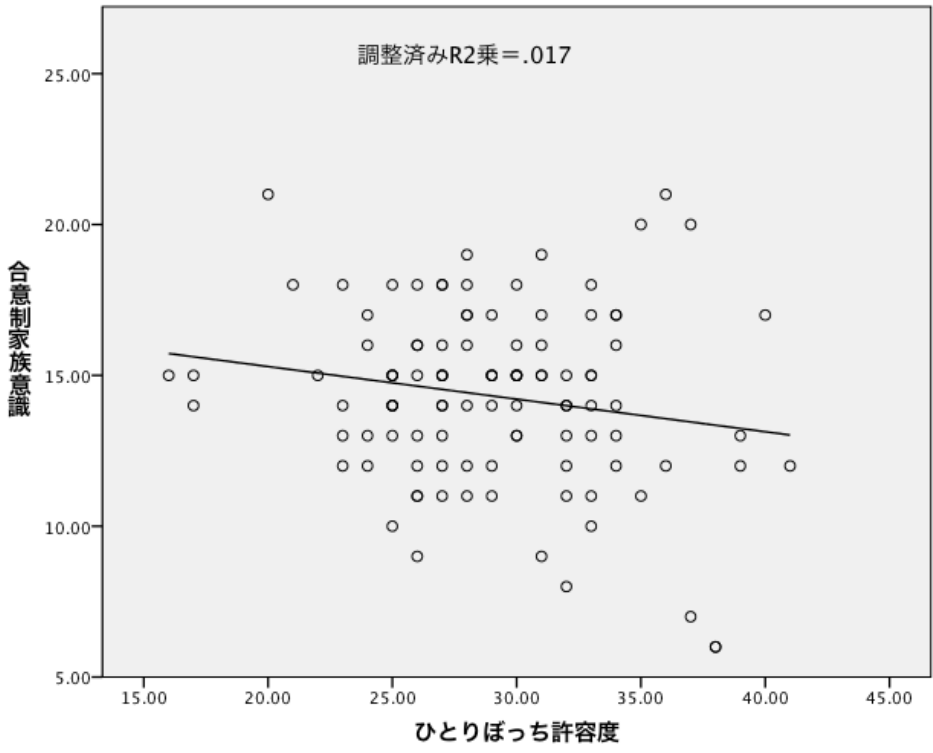


図10 ひひとりぼっち許容度と〈合意制家族〉意識の回帰プロット



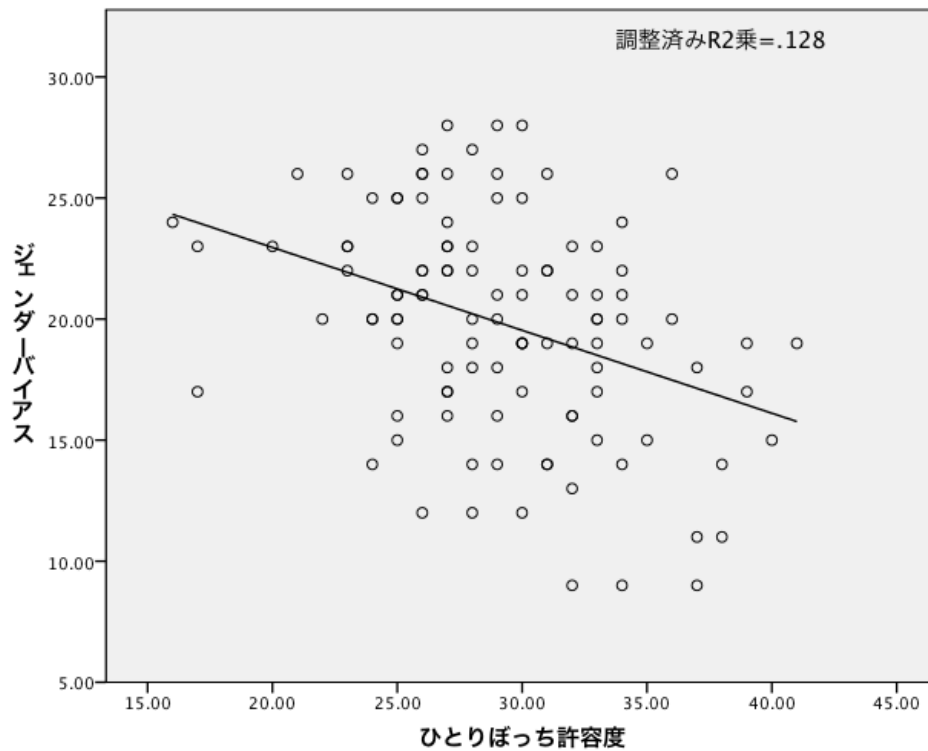


図11 ~~図10~~ ひとりぼっち許容度とジェンダーバイアスの回帰プロット

単回帰分析の結果は、相関分析の結果有意であった、ひとりぼっち許容度と〈直系家族〉意識、〈近代家族〉意識、ジェンダーバイアスにおいて、いずれも強い負の相関を示していることがわかる。〈合意制家族〉では有意な相関は確認されなかった。このことから、「ひとりぼっち許容度の高い人ほど、直系家族意識が低い。」「ひとりぼっち許容度の高い人ほど、近代家族意識が低い。」「ひとりぼっち許容度の高い人ほど、ジェンダーバイアスが低い。」ということがいえるだろう。

### 3.5 一元配置分散分析

次に、「ひとりぼっち許容度」と、「家族システム評価尺度」「性別ダミー」「年齢3分類」の3つの尺度との関係を見ていく。性別と年齢は大嶽ら（2010）による研究から、ひとりぼっち許容度に影響を与えることが分かっているので、ひとりぼっち許容度は従属変数として考える。また、家族システム評価尺度については現在の家族の様子について問うものであり、家族の様子が家族成員にもたらす影響は大きいと考え、この場合もひとりぼっち許容度は従属変数として扱う。

#### (1) 家族システム評価尺度

##### a) きずな

まずは家族システム評価尺度のきずなについて、一元配置分散分析の結果を見ていく。きず

##### 等分散性の検定 ひとりぼっち許容度

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
1.475	3	101	0.226

##### 分散分析 ひとりぼっち許容度

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	152.991	3	50.997	2.204	0.092
グループ内	2337.2	101	23.141		
合計	2490.19	104			

なを独立変数、ひとりぼっち許容度を従属変数として分散分析をした

結果、有意確率が 0.092 であり 10%水準で有意となっている。このため、ひとりぼっち許容度は家族システムの「きずな」の強さによって多少の影響を受ける傾向がある。以上の結果から作成した箱ひげ図（図 12）を見ると、きずなの水準が高くなっていくほどひとりぼっち許容度は低くなっていくという傾向があることが確認できた。

表 9 きずなを独立変数とする、ひとりぼっち許容度の平均値（標準偏差）についての分散分析結果

きずな	バラバラ n=5	サラリ n=58	ぴったり n=38	ベッタリ n=4	F値	有意確率
ひとりぼっち許容度	32.6(6.02495)	29.8276(5.01625)	27.9737(4.46903)	27.25(2.5)	2.204	0.092

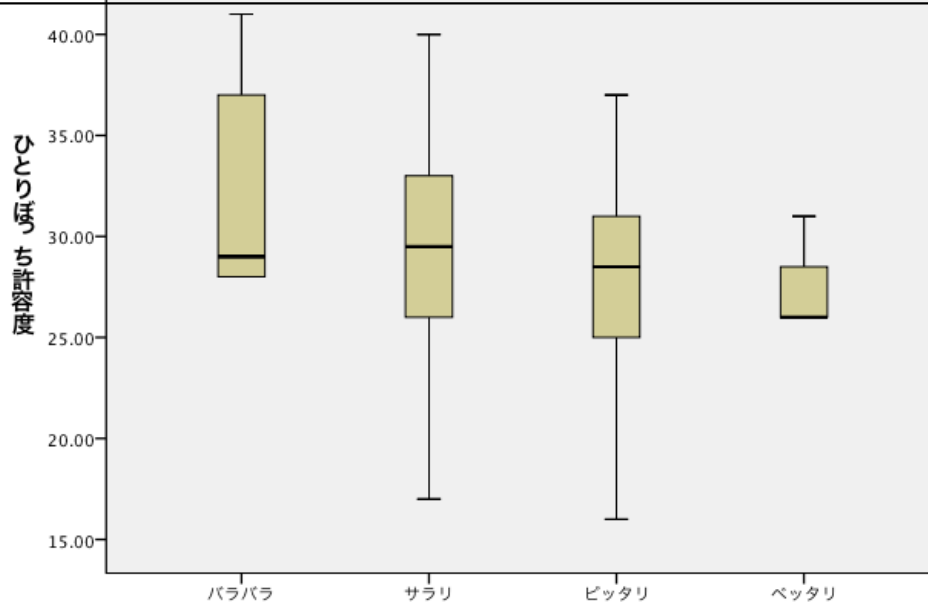


図 11 きずなとひとりぼっち許容度の箱ひげ図

b) かじとり

次に家族システム評価尺度のかじとりについて、結果を見ていく。かじとりを独立変数、ひとりぼ

等分散性の検定  
ひとりぼっち許容度

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率
0.646	3	98	0.587

分散分析  
ひとりぼっち許容度

	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
グループ間	14.306	3	4.769	0.196	0.899
グループ内	2385.067	98	24.337		
合計	2399.373	101			

ちぼ  
っち許  
容度を  
従属変  
数とし  
て分散  
分析を  
行った。  
その結  
果、有  
意確率

が 0.899 となっており、有意な結果は得られなかった。結果に基づき、箱ひげ図を図 13 に示す。

表 10 かじとりを独立変数とする、ひとりぼっち許容度の平均値（標準偏差）についての分散分析結果

かじとり	融通なし n=12	きっちり n=40	柔軟 n=38	てんやわんや n=12	F 値	有意確率
ひとりぼっち許容度	29.3333(5.01513)	28.8(5.52013)	29(4.38671)	30(4.34846)	0.196	0.899

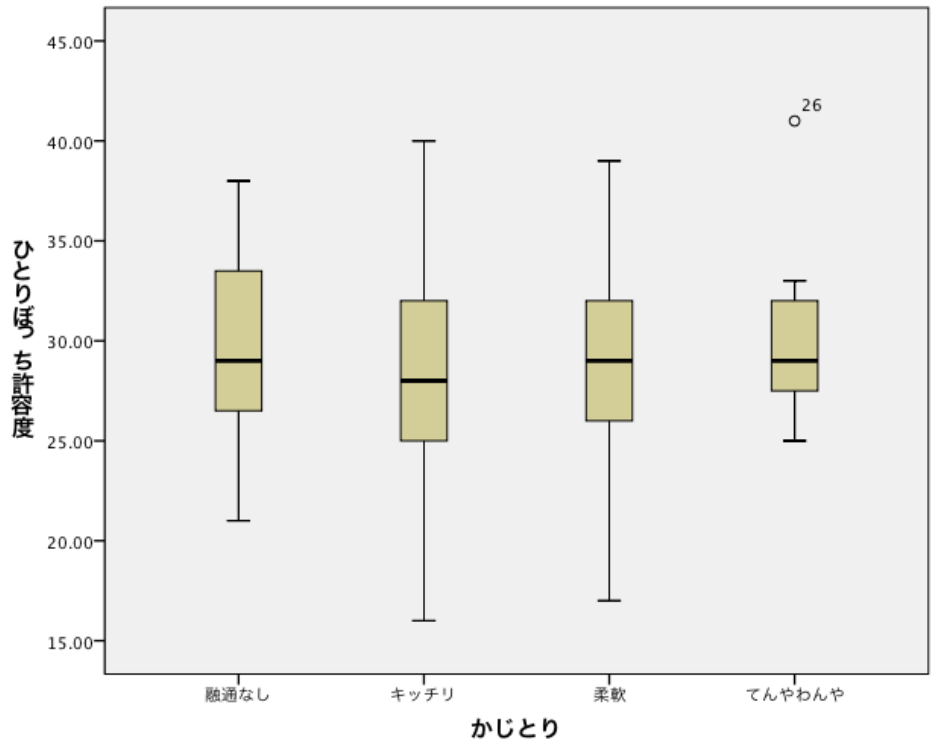


図 13 かじとりとひとりぼっち許容度の箱ひげ図

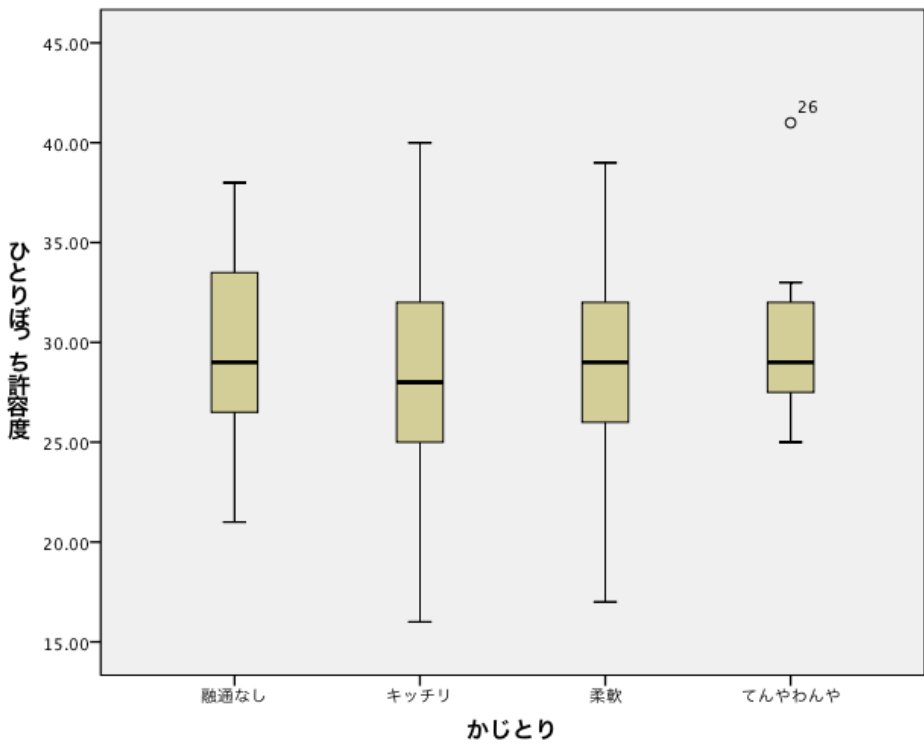


図 12 かじとりとひとりぼっち許容度の箱ひげ図

(2) ミー  
 性別ダ  
 続い  
 ついて  
 である。  
 ミーを  
 数、ひ  
 っち許  
 従属変  
 て分析  
 た。その

性別ダ  
 ては、  
 ミーに  
 の結果  
 性別ダ  
 独立変  
 とりぼ  
 容度を  
 数とし  
 を行っ  
 結果、



る。そのため、ひとりぼっち許容度は年齢3分類の変化に影響を受けていると言える。結果に基づき、年齢3分類とひとりぼっち許容度の箱ひげ図を図15に示した。年齢が高くなることが、ひとりぼっち許容度を高めていることが分かる。

等分散性の検定

ひとりぼっち許容度を年齢3分類を独立変数とする、ひとりぼっち許容度の平均値（標準偏差）

Levene 統計量	自由度 1	自由度 2	有意確率				F 値	有意確率
1.593	2	年齢3分類	104	19歳	20歳	21歳~26歳		
			n=39	n=37	n=31			
分散分析								
ひとりぼっち許容度	ひとりぼっち許容度			27.9231(3.45181)	28.5405(4.79927)	31.1613(5.69852)	4.546	0.013
	平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率			
グループ間	197.25	2	98.625	4.546	0.013			
グループ内	2256.152							
合計	2453.402							

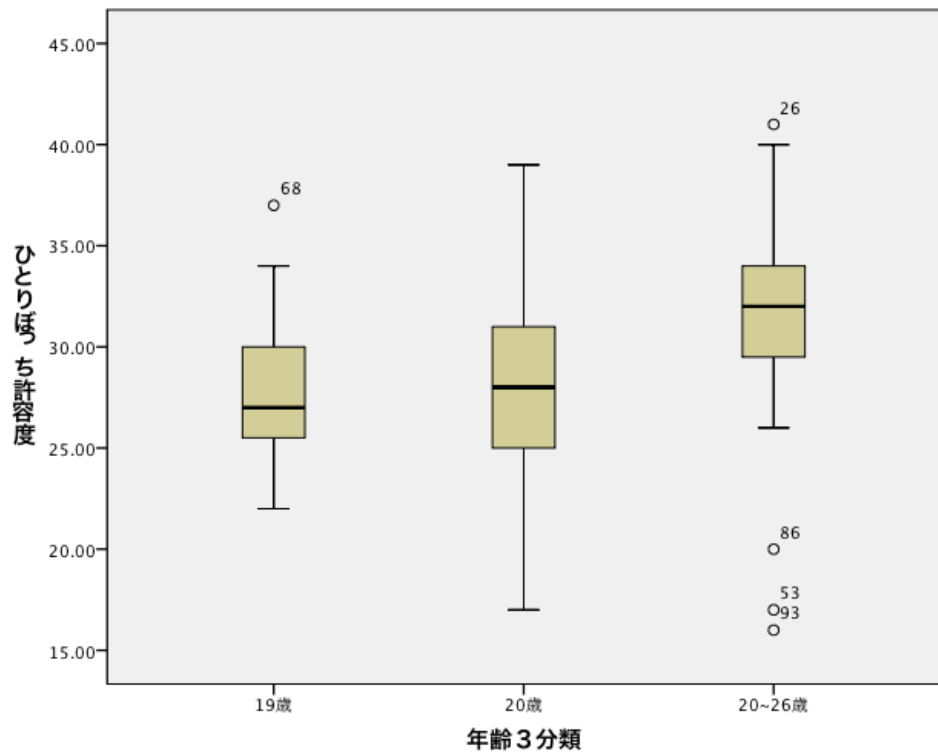


図15 年齢3分類とひとりぼっち許容度の箱ひげ図

## 4 考察

### 4.1 記述統計についての考察

まずは、家族意識、ジェンダー意識の記述統計の結果に基づき、考察をしていく。〈直系家族〉意識では、ほとんどの項目に対して約80%が否定的な回答をしていた。しかし、「結婚時において、姓は夫側の姓を選択したいと思う」という項目に対しては、70%以上の人が肯定していた。この結果は、男子学生を対象に男性意識と家族意識について研究を行った高橋理(2015)の結果と同じとなった。本調査では、対象者の約60%が女性であったが、結婚後の姓は夫側を選択したいという意識は男女ともに同じであると言えるだろう。とはいえ、長男が家や家産を継ぐ、父が家族を統率するといった家父長制のような家族意識は薄いことが分かる。

次に〈近代〉家族についての考察である。こちらは〈直系家族〉意識とは異なり、項目に対して肯定的な回答が多い傾向にある。「家族は何よりもまず、子どものことを第一に優先させるべきだと思う」という子ども中心主義を問う項目に対しては約80%の人が肯定的な回答をした。近代家族の特徴である、家族の集団性の強化、核家族(落合, 1994)を問う質問に対しては否定と肯定ではっきりとした傾向は見られなかった。性別役割分業に関する項目では、結婚において男女に対して求める姿で興味深い結果が得られた。まず、「結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわいい妻」だと思う」という項目に対しては、81%が否定しているのに対し、「結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う」に対しては、85%が肯定している。男子学生を対象にした、高橋(2015)の研究でも同じ結果が得られたことから、女性に対する性別役割分業の意識は低くなっているものの、男性に求められる「家族の経済を支える夫像」の意識は男女とも高いことが分かる。これには性別役割分業が語られる時、女性目線で話されることが多いことが関係しているかもしれない。全体を見ると近代家族意識は強いと分かる。

〈合意制家族〉意識の項目に対しては否定的な意見がほとんどだった。「夫婦で何か方針を決める時は、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの意見・都合を優先させた方がよい」の1項目においてだけ、肯定意見が約80%となった。「同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族である」や「家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う」といった個人のライフスタイルを重視した家族のあり方に対しては半分ほどが肯定している。

ここまで見てきた3つの家族意識の記述統計からは、〈直系家族〉意識からは解き放たれているが、〈合意制家族〉意識の水準までは規範から解放されず、〈近代家族〉意識が未だに強く残っているという結果が読み取れる。〈合意制家族〉意識の結果からライフスタイルを重視した家族形成にも半数が肯定的であることが分かっているので、〈近代家族〉意識から〈合意制家族〉意識へと移行しているのかもしれない。

次にジェンダーバイアスの結果を見ると、全体的に肯定意見が多かった。調査対象者の8割は普段からジェンダー論に触れていると思われる社会学部生だったので、否定意見が多数を占めると考えていたので結果は意外だった。肯定意見の中でも「子どものちょっとした変化に気づくのは母親だと」「思う子どもが病気で苦しんでいる時、それを我が子として感じ取れるのは母親だと思う」「自分が病気や介護を必要とする時、女性に面倒を見てもらいたい」の3項目で肯定意見が70%を超えていた。家族成員にケアを施す母親としての女性像が強く表れていた。反対に否定的な回答が60%を超えていたのは「大地震や火事など緊急事態の時、その場を取り仕切るのは、男でないだめだと思う」「生活優先の政治を推し進められるのは女性だと思う」の2項目でこちらも、高橋(2015)の結果と同じとなった。彼が言うように学生がジェ

ンダーバイアスを発揮した項目は家族間、家庭間の問題であったが、されなかった項目は家庭外の問題であった。家庭内での性別役割の意識が根強いようだ。

最後に家族システム評価尺度に関する項目である。きずな、かじとりどちらにおいても中庸な水準に回答が集中しており、健康的な家族システムを運営できている家庭が多いことが分かった。

#### 4.2 単回帰分析についての考察

次に単回帰分析について考察していく。今回の単回帰分析の結果、有意な相関を示したのは、「ひとりぼっち許容度と〈直系家族〉意識」「ひとりぼっち許容度と〈近代家族意識〉」「ひとりぼっち許容度とジェンダーバイアス」の3つである。この3つすべての組み合わせにおいて、ひとりぼっち許容度とそれぞれの変数間には強い負の相関があることが確認された。この結果から、1章の最後で私が仮定した2つの仮説が支持された。

まず、仮説①「ひとりぼっち許容度の高いほど〈直系家族〉意識や〈近代家族〉意識が低くなり、家族規範から解放された〈合意制家族〉意識が強くなる。」について見ていく。結果から、ひとりぼっち許容度の高まりが〈直系家族〉意識と〈近代家族〉意識を弱めていることが分かる。しかし、〈合意制家族〉意識に関しては有意な相関が見られなかったため、ひとりぼっち許容度が〈合意制家族〉意識を高めていることは確認できなかった。

次に仮説②「ひとりぼっち許容度高いほど、近代家族の大きな特徴である性別役割分業の意識からも解放されると考えられるのでジェンダーバイアスも低くなる。」であるが、これは結果から、ひとりぼっち許容度の高まりがジェンダーバイアスを低くしていることが確認されるので、支持された。

以上のように、ひとりぼっち許容度の高まりは今までの日本の伝統的な家族意識や性別役割分業の意識を弱める。ひとりぼっち許容度が高い人が、家族の形を既存の形に変えていく可能性はあるかもしれないが、それが〈合意制家族〉であるかどうかは今回の調査では明らかにできなかった。ライフスタイルとしての家族(野々山, 2007)はまだ、おそらく近代家族の中で育ってきた現時点(2016年)の大学生には現実味が持てなかったのかもしれない。

#### 4.3 一元配置分散分析についての考察

最後に一元配置分散分析の結果について見ていく。「家族システム評価尺度」「性別ダミー」「年齢3分類」を独立変数に、「ひとりぼっち許容度」を従属変数として分析を行った。

まず、家族システム評価尺度では、きずなとひとりぼっち許容度との間に緩やかな負の相関が確認された。 $(F(3, 101)=2.204, p<.01)$  このことから、仮説③「家族の「きずな」が高い方が、ひとりぼっち許容度は低くなる。」は支持される。

一方で、かじとりとひとりぼっち許容度の間には相関がみられなかった。そのため、仮説④「家族の「かじとり」が固い方が、ひとりぼっち許容度は高くなる。」は支持されない。以上から、家族システムのきずなの強さは家族成員のひとりぼっち許容度を弱めている傾向があるが、かじとりは影響を持たないことが言える。家族のきずなが強ければ、一緒に過ごす時間のコミュニケーションの密度は濃くなると想像できる。そして、ひとりであることへの孤独感を強めているのかもしれない。家族内でのコミュニケーションが個人の対人関係にも影響をもち、ひとりぼっちを回避する行動を増やしているのだろう。



最後に性別ダミーと年齢3分類の結果を見ていく。性別ダミーとひとりぼっち許容度の間には、10%水準の弱い相関がみられた。図13の箱ひげ図を見ると女性のほうがひとりぼっち許容度の平均値が高いことが読み取れることから、男性より女性の方がひとりぼっち許容度が高い傾向がある。これは大嶽ら(2010)の論とは違う結果となった。

次に年齢3分類とひとりぼっち許容度であるが、こちらは相関( $F(2,104)=4.546, p<.005$ )が確認できた。年齢の高まりがひとりぼっち許容度を高めていると言える。これは、若者が年齢を重ねるごとに友達とどのような距離感で関われば円滑であり、高ストレス状態に陥らないのかということを知得している(大嶽ほか, 2010)姿の表れだろう。以上から、仮説⑤「ひとりぼっち許容度は、女性のほうが低く、また年齢が上がるほど高くなる。」は、年齢が上がるほど高くなることだけが支持されると本調査では確かめることができた。

## おわりに

本研究により、ひとりぼっち許容度の高まりは〈直系家族〉意識や〈近代家族〉意識といったこれまでの日本の家族規範に則った家族意識やジェンダーバイアスを弱める作用があることが示唆された。また、それは家族のきずなの強さや年齢の上昇によって強められ、性別による違いもあると確認できた。ひとりぼっち許容度の高まりが家族規範や性別役割の考えから解放されていることを示していることから、ひとりぼっち許容度は個人の個人化の指標として用いることができるかもしれない。

個人化の進む社会で、ひとりぼっち許容度の高さは近代家族に変わる新しい家族意識を生み出す可能性があるだろう。しかし、〈直系家族〉意識や〈近代家族〉意識を弱めても、〈合意制家族〉意識を強めていたわけではなく、ライフスタイルとして家族を捉えるという近年の流れはひとりぼっち許容度の高まりでは説明できなかった。まだまだ、近代家族が理想の家族とする考えが根強く残っているのだろう。日本は、世界経済フォーラムが発表している世界各国の男女平等の度合いを指数化したジェンダーギャップ指数が、2016年は114国中111位と過去最低の水準となった。教育や健康の分野では高水準となっているものの、経済参画、政治参画の分野がまだまだ他の先進国に劣っている。性別役割分業の意識が未だに強く残っていることがここからもわかる。個々人のひとりぼっち許容度が高まり、従来の規範にとらわれず緩やかなつながりの中で行動することが個人化する社会の中では重要になってくるのではないだろうか。

最後に、今回の研究における問題点をあげるならば、一つはサンプルに性別や所属学部への偏りがあったことだ。女性(n=67)と男性(n=39)で女性が男性の1.7倍の人数となってしまった。また、サンプルの8割が日頃社会問題などに多く触れていると思われる社会学部生となっていることも、結果に影響を与えたかもしれない。もう一つは用いた尺度の妥当性だ。今回の調査では2015年に高橋が作成した家族意識の項目を利用したが、質問の内容を逆転させただけの項目が幾つか見られた。例えば〈直系家族〉意識の「夫婦で何か方針を決める時は、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの都合・意見を優先させた方がよい」と〈合意制家族〉意識の「夫婦で何か方針を決める時は、どちらかの意見・都合を優先させるより、

お互いの意見・都合を優先させた方がよい」、〈近代家族〉意識の「結婚は個人のライフスタイルの優先をするよりも、集団としてまとまりを強めるべきである」と〈合意制家族〉意識の「家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う」という項目等がそれにあたる。吉岡（2014）は〈合意制家族〉が今までの〈直系家族〉と〈近代家族〉とはまったく違う家族の枠組みであることを比較するために2通りの質問をした可能性があるが、同じことを2度回答させることになってしまう。家族を形成することへの選択制や、事実婚についての賛否を問う質問の方が野々山（2007）の言う〈合意制家族〉に近づけていたのではないだろうか。

最後に、本文執筆にあたり調査にご協力いただいた同志社大学の学生の皆様、ご指導いただいた立木茂雄教授、本当にありがとうございました。

### 【文献】

- 土井隆義，2004，『「個性」を煽られる子どもたち——親密圏の変容を考える——』，岩波書店。
- ，2014，『つながりを煽られる子どもたち——ネット依存といじめ問題を考える——』，岩波書店。
- 原克彦，2016，「男女平等ランキング、日本は過去最低 111 位」，日本経済新聞ホームページ，（2016 年 12 月 18 日 取得，[http://www.nikkei.com/article/DGXLASDF25H07\\_V21C16A0EE8000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDF25H07_V21C16A0EE8000/)）。
- J-CAST ニュース，2009，「1人で食べる姿見られたくない 若者の「便所飯」あるのか？」，J-CAST ニュースホームページ（2016 年 12 月 3 日 取得，[www.j-cast.com/2009/07/07044847.html?p=all](http://www.j-cast.com/2009/07/07044847.html?p=all)）。
- 厚生労働省，2013，「平成 25 年版厚生労働白書 ー若者の意識を探るー 第 2 節結婚に関する意識」，厚生労働省ホームページ，（2016 年 12 月 3 日 取得，<http://www.mhlw.go.jp/wp/hakusyo/kousei/13/dl/1-02-2.pdf>）。
- 落合恵美子，1994，『21 世紀家族へ（第 3 版）』，有斐閣。
- 大嶽さとこ，2007，「「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響——面接データに基づく女子グループの事例的考察」，『カウンセリング研究』，40(3):267-277。
- ・吉田俊和，2008，「「ひとりぼっち回避規範」に関する一考察」，『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学』，55:179-186。
- ・多川則子・吉田俊和，2010，「青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達の変化——面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み——」，『対人社会心理学研究』，10:179-185。
- ，2013，「「ひとりぼっち回避規範」が友人関係に及ぼす影響」，名古屋大学大学院教育発達科学研究科 2013 年博士論文。
- 総務省，2010，「年齢別婚率の推移」，内閣府ホームページ，（2016 年 12 月 3 日 取得，<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/data/mikonritsu.html>）。
- 総務省，2014，「高校生のスマートフォン・アプリ利用とネット依存傾向に関する調査報告書」，総務省ホームページ，（2016 年 12 月 3 日 取得，[http://www.soumu.go.jp/menu\\_news/s-news/01iicp01\\_02000020.html](http://www.soumu.go.jp/menu_news/s-news/01iicp01_02000020.html)）。

- 高橋理, 2015, 「シングル男性の男性意識のありかた——ジェンダーと家族意識の視点から——」, 立木茂雄研究室ホームページ, (2016年, 12月7日取得, <http://www.tatsuki.org>).
- 立木茂雄, 1999, 『家族システムの理論的・実証的研究』, 川島書店.
- 立木茂雄, 2009, 「家族システム評価尺度 FACESKGIV-16」, 立木茂雄研究室ホームページ, (2016年7月25日取得, <http://www.tatsuki.org>).
- 山田昌弘, 2013, 「日本家族のこれから——社会の構造転換が日本社会に与えたインパクト——」, 『社会学評論』, 64(4), 649-662.
- , 2014, 「家族の個人化」, 『社会学評論』, 54(4), 341-354.

# 家族に関する意識調査

社会学部 社会学科 立木ゼミ 4年  
田中美穂(bsn1066@mail2.doshisha.ac.jp)  
山岡奈津美(bsn1075@mail2.doshisha.ac.jp)

## 調査ご協力のお願い

本調査は、社会学部社会学科の卒業論文のデータとして使用することを目的としています。本調査でお尋ねする内容は、家族に対する考えやジェンダー、大学生活に関することです。回答につきましては、コンピュータで処理を行い、数値化されるため、個人の回答が特定されることはありません。

なお、回答につきましては、実数を記入する回答を除きましてあてはまる番号を1つ選択し、回答していただきますようお願いいたします。また、最後までご記入いただきましたら、恐れ入りますが、見落とし防止のために書き漏らしがないかもう一度ご確認ください。ご多忙とは存じますが、どうか最後までご協力いただきますようお願い申し上げます。

【問1】

以下は、男女の役割についての項目です。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはま らない	4 あてはま らない
① 人から危害を加えられそうになったとき、身を守るのは男でないとだめだと思う	1	2	3	4
② 大地震や火事など緊急事態の時、その場を取り仕切るのは、男でないとだめだと思う	1	2	3	4
③ 重いものを運んでもらうとき、男でないとだめだと思う	1	2	3	4
④ 自分が病気や介護を必要とするとき、女性に面倒を見てもらいたい	1	2	3	4
⑤ 健康や生活に関わる事柄に敏感なのは女性だと思う	1	2	3	4
-----				
⑥ 子供が病気で苦しんでいる時、それを我が子として感じ取れるのは母親だと思う	1	2	3	4
⑦ 生活優先の政治を推し進められるのは女性だと思う	1	2	3	4
⑧ 子どものちょっとした変化に気づくのは母親だと思う	1	2	3	4
⑨ 感情的な行動を男性が取るべきではない感情的な男性はみっともないと思う	1	2	3	4
⑩ 男性は怒ってもそれを顔に出すべきではない	1	2	3	4
-----				
⑪ 肉食主義の男性は魅力的でないと思う	1	2	3	4
⑫ 酒豪の男性は男らしいと思う	1	2	3	4
⑬ 父親は家族の為にはどんなことでも我慢するべきだと思う	1	2	3	4
⑭ 下戸の男性はみっともないと思う	1	2	3	4
⑮ 体調不良になっている男性は情けないと思う	1	2	3	4

【問2】

以下は、家族のあり方についてたずねる項目です。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはまら ない	4 あてはま らない
------------	------------------------	------------------------------	------------------

- |   |   |   |   |   |
|---|---|---|---|---|
| ①長男は結婚した後、両親と同居するべきだ  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ②子どもが一人しかいない場合に望む子どもの性別は男児である                               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ③結婚時において、姓は夫側の姓を選択したいと思う                                    | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ④家族を統率する権利は父親(夫)が持ち、長男が相続するべきだと思う                           | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑤夫婦で何か方針を決めるときは、お互いの都合・意見を同じくらい優先させるよりどちらかの都合・意見を優先させたほうがよい | 1 | 2 | 3 | 4 |
| -----   |   |   |   |   |
| ⑥家族は何よりもまず、子どものことを第一に優先させるべきだと思う                            | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑦夫婦がいて子どもが2,3人いる核家族形態こそ、あるべき家族の姿だと思う                        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑧結婚において男性に求めるのは「安定した収入と頼りがいのある夫」だと思う                        | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑨夫婦は離婚すべきではないと思う  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑩結婚において女性に求めるのは「家庭で夫を支えるかわい妻」だと思う                           | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑪結婚は個人のライフスタイルの優先をするよりも、集団としてまとまりを強めるべきである                  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑫夫婦で何か方針を決めるときは、どちらかの意見・都合を優先させるより、お互いの意見・都合を優先させたほうがよい     | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑬家族は集団としてまとまりを強めるよりも、個人のライフスタイルを優先させるべきだと思う                 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑭老後は老夫婦だけで暮らすのがよいと思う  | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑮子どもが一人しかいない場合に望む子どもの性別は女児である                               | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑯同性の友人など非血縁者であっても一緒に住んで生活している場合は家族である                       | 1 | 2 | 3 | 4 |
| ⑰結婚時において、姓を変えることに抵抗がある                                      | 1 | 2 | 3 | 4 |

**【問3】**

以下は、あなたの交友関係についてたずねる項目です。  
 もっともあてはまる数字を一つ選んで○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはまら ない	4 あてはま らない
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4
-----			
1	2	3	4
1	2	3	4

- ①何でも話せる友達がいる
- ②友達付き合いが面倒に感じることもある
- ③一人でいる時間は必要だ
- ④気の合わない人とも話をする事ができる
- ⑤付き合っている異性の友達(彼氏・彼女)がいる

**【問4】**

以下は、あなたが現在や未来の自分をどのように考えているかをたずねる項目  
 です。  
 あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 あてはまる	2 どちらかといえ ばあてはまる	3 どちらかといえ ばあてはまら ない	4 あてはま らない
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4
-----			
1	2	3	4
1	2	3	4
1	2	3	4

- ① 私は自分自身に満足している
- ② 自分には長所があると感じる
- ③ 自分の親から愛されている(大切にされている)と思う
- ④ ときどき、自分は役に立たないと強く感じるこがある
- ⑤ 早く結婚して自分の家族を持ちたい
- ⑥ 早く親元から独立したい

【問5】

以下は、あなたの20年後についてたずねる項目です。20年後、次のようなことをしていると思いますか。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 そう思う	2 どちらかといえ ばそう思う	3 どちらかといえ ばそう思わない	4 そう思わない
①社会的に高い地位についている	1	2	3	4
②世の中の役に立つ仕事をしている	1	2	3	4
③やりがいを感じる仕事をしている	1	2	3	4
④家業を継いだり、親と同じ職業についたりしている	1	2	3	4
-----				
⑤結婚している	1	2	3	4
⑥子供を育てている	1	2	3	4
⑦仕事以外の仲間や友人とも親しく付き合っている	1	2	3	4

【問6】

以下はあなたの意見や考えについてたずねる項目です。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

	1 そう思う	2 どちらかといえ ばそう思う	3 どちらともい えない	4 あまりそう思 わない	5 そう思わない
①自分の考え方に従って、人生を形づくるように努力する	1	2	3	4	5
②責任のある仕事に就きたいと思う	1	2	3	4	5
③たとえ良いアドバイスであっても、自分のやっていることにあれこれ言われたくない	1	2	3	4	5
④自分で行動するよりは誰かに指示をする立場になりたいと思う	1	2	3	4	5
-----					
⑤もし友人全員の意見と異なることがあっても自分の意見をはっきり述べる	1	2	3	4	5
⑥強い権力がふるえる地位につきたい	1	2	3	4	5
⑦自分の意見にはいつも自信がある	1	2	3	4	5
⑧他人の意見を受け入れることに抵抗を感じる	1	2	3	4	5
⑨自分の意見はできるだけ曲げたくない	1	2	3	4	5



【問7】

以下は、あなたの競争意識についてたずねる項目です。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 そう思う	2 どちらかといえばそう思う	3 どちらともいえない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
-----------	-------------------	----------------	----------------	-------------

- ⑤競争で負けることは悔しいと思う
- ⑧競争で負けることはできるだけ避けたい
- ⑨どんなことでも勝利を目指すべきだと思う

1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5

- 
- ⑩試験の点数が低いと恥ずかしく思う
  - ⑫物事はできるだけ自分一人の力で解決したいと思う

1	2	3	4	5
1	2	3	4	5

～

【問8】

以下は、あなたの経済的な意識についての項目です。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 そう思う	2 どちらかといえばそう思う	3 どちらともいえない	4 あまりそう思わない	5 そう思わない
-----------	-------------------	----------------	----------------	-------------

- ①金銭的に裕福な男性は男らしいと思う
- ②あまり収入はよくなくても、やりがいのある仕事ならそれでよいと思う
- ③家族の経済的安定よりも、魅力ある仕事のほうが大切だ
- ④お金持ちになりたいと思う
- ⑤金持ちであることは良いことだと思う

1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5

- 
- ⑥経済的に豊かでありたい
  - ⑦物理的に裕福でありたいと思う
  - ⑧経済的には恵まれなくても、気ままに楽しく暮らせればよいと思う
  - ⑨この世の中は結局金次第だと思う

1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5
1	2	3	4	5

【問9】

次に挙げられる事柄は、学校生活の中で見られる行動です。これらの行動はあなたにとってどのくらいそうした方がいいと思う（望ましいと思う）ことですか。あなたの考えにもっとも近い数字を一つ選んで○をつけてください。

1 非常にそうした方がいいと思う	2 そうした方がいいと思う	3 そうした方がいいと思わない	4 まったくそうした方がいいと思わない
---------------------	------------------	--------------------	------------------------

①サークルなどの集まりに参加する際、誰かと誘い合う	1	2	3	4
②新たな環境に身を置いたら、なるべく早いうちに、一緒にいてくれる友達を探す	1	2	3	4
③友達と約束した上で、一緒に帰る	1	2	3	4
④休み時間を友達と一緒に過ごす	1	2	3	4
⑤昼休みに友達と一緒に昼食をとる	1	2	3	4
⑥教室に誰かと一緒に行く	1	2	3	4
-----				
⑦学生支援センターや教授の研究室に用がある時、誰かについてきてもらう	1	2	3	4
⑧友達と誘い合ってトイレに行く	1	2	3	4
⑨履修を決める時、あらかじめ友達と一緒にやるよう打ち合わせておく	1	2	3	4
⑩どのサークルやゼミに入るかを友人と相談して決める	1	2	3	4
⑪登校する時、どこかで友達と待ち合わせをする	1	2	3	4

【問10】以下の2つの質問は、あなたの家族のよつずについてお聞きするものです。それぞれについて、あなたのご家族に最も当てはまるものを1つ選んで、[ ]の中に○をつけてください

家族の中でのそれぞれの役割やふるまいについて	一緒に過ごす時間について
1[ ]問題が起こると家族みんなで話し合い、決まったことはみんなの同意を得たことである	1[ ]たいがい各自好きなように過ごしているが、たまには家族一緒に過ごすこともある
2[ ]家でのそれぞれの役割ははっきりしているが、皆でおぎないあうこともある	2[ ]わが家では、子どもが落ち込んでいる時は親も心配するが、あまり聞いたりしない
3[ ]困ったことが起こった時、いつも勝手に判断を下す人がいる	3[ ]悩みを家族に相談することがある
4[ ]わが家ではそれぞれの家での役割を気軽に交代することができる	4[ ]家族はお互いの体によくふれあう
5[ ]家の決まりは皆が守るようにしている	5[ ]家族の間で、用事以外の関係は全くない
6[ ]わが家はみんなで約束したことでもそれを実行することはほとんどない	6[ ]家族のものは必要最低限のことは話すが、それ以上はあまり会話がな
7[ ]問題が起こると家族で話し合いがあるが、物事の最終決定はいつも決まった人の意見がおとる	7[ ]休日は家族で過ごすこともあるし、友人と遊びに行くこともある
8[ ]わが家では家族で何か決めても、守られたためしがな	8[ ]誰かの帰りが遅い時には、その人が帰るまでみんな起きて待っている

【問 1 1】

以下の問にお答えください。

①あなたの年齢と性別を教えてください。

年齢 (            ) 歳    性別 ( 男 ・ 女 )
-------------------------------------

②あなたの学部についてお伺いします。

(            ) 学部 (            ) 学科 (            ) 年生
---

③現在、実家、下宿のどちらから通学されていますか。

1 実家 ・ 2 下宿
-------------

付問：あなたの実家の家族構成についてお聞きします。

実家の家族を構成するすべての方に、○をつけ、複数いる場合は人数もお書きください。

1. 父	6. 母
2. 祖父	7. 祖母
4. 兄 (    ) 人	9. 姉 (    ) 人
5. その他 (            ) (    ) 人	

④あなたは、父親と平日に平均何分くらい話しますか。

(            ) 分
------------------

⑤あなたは、父親と休日に平均何分くらい話しますか。

(            ) 分
------------------

⑥あなたは、母親と平日に平均何分くらい話しますか。

(            ) 分
------------------

⑦あなたは、母親と休日に平均何分くらい話しますか。

年齢 (            ) 歳    性別 ( 男 ・ 女 )
-------------------------------------

質問は以上になります。恐れ入りますが、記入漏れが無いかも  
う一度ご確認ください。ご回答いただきましてありがとうございました。